

第 12 回 評 価 委 員 会  
村田町竹の内地区産業廃棄物最終処分場  
生活環境影響調査報告書  
概 要 版

宮 城 県

## ■生活環境影響調査

### 1. 生活環境影響調査の概要

村田町竹の内地区産業廃棄物最終処分場（以下、「処分場」という。）に係る支障除去対策工事後において、処分場内の状況及び処分場内廃棄物による地域住民の生活環境に対する影響を把握し、地域住民の安全安心を確保するために、生活環境影響調査（以下、「環境モニタリング」という。）を実施したものである。

平成23年4月から平成23年9月までに実施した環境モニタリングの概要は、以下のとおりである。

#### 1.1 調査実施期間

平成23年4月から平成23年9月まで

#### 1.2 調査項目

調査実施期間における調査実績は表1.1に示すとおりである。なお、工事後のモニタリング計画では、表1.2のとおり大気及び水質等に関する調査を実施することとしている。

### 2. 環境モニタリングの結果及び評価

環境モニタリングの結果、処分場敷地境界における硫化水素濃度、処分場下流側地下水の水質、放流水の水質は法令に規定される規制基準等を満たしており、また、有害物質の放散による大気汚染、放流水の影響による放流先公共用水域の水質悪化は認められなかった。このことから、本調査期間においては、処分場で発生するガス及び処分場の浸透水等が周辺地域の生活環境に支障を及ぼすような状況にないものと判断される。

しかし、処分場内の観測井戸での調査結果では、地中温度が周辺よりも20℃近く高い地点、鉛、砒素、ベンゼン、BODが廃棄物処理法に定める地下水等検査項目基準等を超える地点、ダイオキシン類濃度、1,4-ジオキサン等が地下水環境基準を超える地点があり、発生ガスで浸透水が噴出する事象が時々発生するなど、処分場内部は安定した状況には至っていない。

このことから、引き続き、生活環境への影響及び処分場の状況を把握するためのモニタリングを実施し、その結果を踏まえ、必要に応じて追加調査の実施を検討するなど処分場の状況に応じた適切な対応を図る必要がある。また、モニタリングデータが蓄積されてきたことから、処分場の将来見通しが立つようなデータ解析の検討なども併せて行う時期に来ている。

本調査期間における環境モニタリング結果の詳細を以下に示す。

表 1.1 H23 年度 環境モニタリングの実績

調査名	調査地点	調査頻度等	H23年度調査													
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
大気環境調査	2地点 (処分場内, 村田町役場)	年4回			●		●									
		年1回					●									
硫化水素連続調査	3地点 (処分場内敷地境界1, 処分場内敷地境界2, 村田第2中学校)	24時間連続	●	●	●	●	●	●								
放流水水質調査	1地点 (放流水採取地点)	年4回					●		●							
		年1回							●							
		ダイオキシン類に関しては年2回									●					
河川水水質調査	2地点 (荒川上流, 荒川下流)	年4回					●		●							
		年1回							●							
浸透水及び地下水水質調査	浸透水 9地点 (No3, No5, H16-3, H16-5, H16-6, H16-10, H16-11, H16-13, H17-15) 地下水 4地点 (Loc1A, Loc1B, Loc3, H17-19)	年4回			●				●							
		年1回							●							
		ダイオキシン類に関しては年2回									●					
発生ガス等調査	11地点 (No3, No5, H16-3, H16-5, H16-6, H16-10, H16-11, H16-13, H17-15, ガス抜き管7-2, ガス抜き管7-4)	月1回	●	●	●	●	●	●	●							
下流地下水状況調査	2地点 (Loc1A, Loc1B)	月1回	●	●	●	●	●	●								
放流水状況調査	1地点 (放流水採取地点)	月1回	●	●	●	●	●	●								
地中温度調査	廃棄物埋立区域内 9地点 (No3, No5, H16-3, H16-5, H16-6, H16-10, H16-11, H16-13, H17-15)	年4回					●		●							
地下水位調査	廃棄物埋立区域外 5地点 (Loc1A, Loc1B, Loc3, Loc4, H17-19)	24時間連続	●	●	●	●	●	●								
多機能性覆土状況調査	多機能性覆土施工箇所 13地点 (A-1, A-2, A-3, A-4, A-5, A-6, B-1, B-2, B-3, B-4, B-5, B-6, B-7) 多機能性覆土隣接地等 13地点	年4回			●				●							
地表ガス調査	5地点 (平成22年度表層ガス調査において、比較的高いガス濃度の硫化水素が検出された地点)	年4回			●				●							
バイオモニタリング	2地点 (荒川上流, 荒川下流)	年4回							●							

● : 調査済み

表 1.2 工事後のモニタリング計画

調査内容					
調査目的	内容	名称	調査項目	調査地点（箇所）	調査頻度等
生活環境保全上の支障の有無の把握	発生ガス、悪臭	大気環境調査	硫化水素、塩化ビニル、1,3-ブタジエン、ジクロロメタン、アクリロトリル、クロホルム、1,2-ジクロロエタン、ベンゼン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン、塩化メチル、塩化エチル、1,2-ジクロロプロパン、1,1,1-トリクロロエタン、フルオン12、フルオン14、臭化メチル、フルオン11、フルオン13、四塩化炭素、トルエン、エチルベンゼン、p,m-キシレン、o-キシレン、スチレン、1,3,5-トリメチルベンゼン、1,2,4-トリメチルベンゼン、1,4-ジクロロベンゼン、アセトアルデヒド、メタン、アンモニア、水銀及びその化合物	2地点 (処分場内、村田町役場)	年4回
			クロロベンゼン、シス-1,2-ジクロロエチレン、1,1,2-トリクロロエタン、塩化ビニリデン、1,1-ジクロロエタン、シス-1,3-ジクロロプロパン、トランス-1,3-ジクロロプロパン、1,2-ジブチルエタン、1,1,2,2-テトラクロロエタン、1,3-ジクロロベンゼン、1,2-ジクロロベンゼン、1,2,4-トリクロロベンゼン、ヘキサクロ-1,3-ブタジエン、イタン		
		硫化水素連続調査	硫化水素、風向、風速	3地点 (処分場内敷地境界1、処分場内敷地境界2、村田第2中学校)	24時間連続
	放流水	放流水水質調査	排水基準項目 (総水銀、鉛、有機リン、六価クロム、ヒ素、1,2-ジクロロエタン、ベンゼン、杓素、フッ素、アンモニア、pH、BOD、浮遊物質量、ルルルキサン(鉱油)、ルルルキサン(動植物油)、フェノール含有量、銅含有量、亜鉛含有量、溶解性鉄含有量、溶解性マンガ含有量、クロム含有量、大腸菌群数、ダイオキシン類)	1地点 (放流水採取地点)	年4回 (ダイオキシン類は年2回)
			(アルキル水銀、カドミウム、シアン、PCB、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン、ジクロロメタン、四塩化炭素、1,1-ジクロロエチレン、シス-1,2-ジクロロエチレン、1,1,1-トリクロロエタン、1,1,2-トリクロロエタン、1,3-ジクロロプロパン、チウラム、シマジン、チオベンカルブ、セレン)		
			塩化物イオン、硫酸イオン、電気伝導率、透視度、水温、流量、1,4-ジメチル、無機体炭素、D0		
	河川水	河川水水質調査	環境基準健康項目(鉛、六価クロム、砒素、総水銀、1,2-ジクロロエタン、ベンゼン、硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素、杓素、フッ素、1,4-ジメチル)	2地点 (荒川上流、荒川下流)	年4回
			(カドミウム、全シアン、アルキル水銀、PCB、ジクロロメタン、四塩化炭素、1,1-ジクロロエチレン、シス-1,2-ジクロロエチレン、1,1,1-トリクロロエタン、1,1,2-トリクロロエタン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン、1,3-ジクロロプロパン、チウラム、シマジン、チオベンカルブ、セレン)		
			環境基準生活環境項目(pH、BOD、浮遊物質量、D0、大腸菌群数)		
	浸透水、周辺地下水	浸透水及び地下水水質調査	地下水等検査項目(総水銀、鉛、六価クロム、ヒ素、1,2-ジクロロエタン、ベンゼン)	浸透水 9地点 (No3、No5、H16-3、H16-5、H16-6、H16-10、H16-11、H16-13、H17-15)	年4回
(アルキル水銀、カドミウム、全シアン、PCB、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン、ジクロロメタン、四塩化炭素、1,1-ジクロロエチレン、シス-1,2-ジクロロエチレン、1,1,1-トリクロロエタン、1,1,2-トリクロロエタン、1,3-ジクロロプロパン、チウラム、シマジン、チオベンカルブ、セレン)					
ダイオキシン類、BOD、水温、pH、電気伝導率、酸化還元電位、塩化物イオン、硫酸イオン、浮遊物質量、杓素、フッ素、塩化ビニルモノマー、1,4-ジメチル、重炭酸イオン、硫化物イオン					
処分場内の状況把握	発生ガス、浸透水、下流地下水、放流水	発生ガス等調査	発生ガス (発生ガス量、メタン、二酸化炭素、硫化水素、酸素、孔内温度(管頭下1m)、気象(気温、気圧)) 浸透水 (電気伝導率、酸化還元電位、塩化物イオン、硫酸イオン、透視度、水温、水位、pH)	11地点 (No3、No5、H16-3、H16-5、H16-6、H16-10、H16-11、H16-13、H17-15、ガス抜き管7-2、ガス抜き管7-4)	月1回
		下流地下水状況調査	電気伝導率、酸化還元電位、塩化物イオン、硫酸イオン、透視度、水温、水位、pH	2地点(Loc1A、Loc1B)	
		放流水状況調査	電気伝導率、酸化還元電位、塩化物イオン、硫酸イオン、透視度、水温、pH	1地点(放流水採取地点)	
	地中温度、地下水位	地中温度調査	鉛直方向1m毎の温度、帯水域の温度	廃棄物埋立区域内 9地点 (No3、No5、H16-3、H16-5、H16-6、H16-10、H16-11、H16-13、H17-15)	年4回
		地下水位調査	地下水位、降雨量	廃棄物埋立区域外 5地点 (Loc1A、Loc1B、Loc3、Loc4、H17-19)	24時間連続
	多機能性覆土	多機能性覆土状況調査	硫化水素	多機能性覆土施工箇所 13地点 (A-1、A-2、A-3、A-4、A-5、A-6、B-1、B-2、B-3、B-4、B-5、B-6、B-7)	年4回
		地表ガス調査		多機能性覆土隣接地等 13地点 5地点(平成22年度表層ガス調査において、比較的高いガス濃度の硫化水素が検出された地点)	
	バイオモニタリング	バイオモニタリング	AOD試験*1による半数致死濃度 (*1:水族環境診断法: Aquatic Organisms environment Diagnostics)	2地点 (荒川上流、荒川下流)	年4回

## 2.1 生活環境保全上の支障の有無の把握に関する環境モニタリング

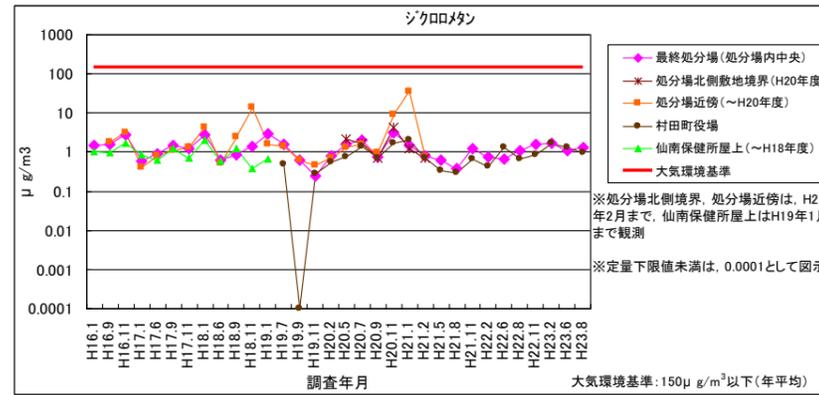
### 2.1.1 大気環境調査

処分場の発生ガスによる生活環境保全上の支障の有無を把握するため、6月と8月に処分場内と対照地点(処分場から4km以上離れた村田町役場)の2地点で大気環境調査を実施した。

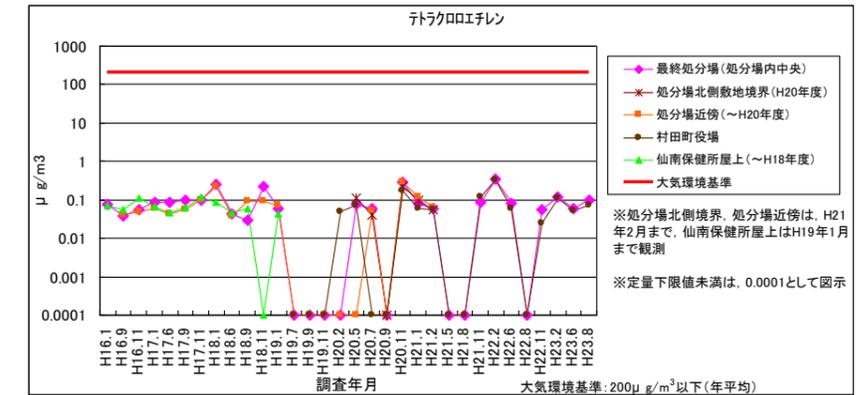
測定した46物質のうち、環境基準が定められている4物質(ジクロロメタン、ベンゼン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン)や、指針値が定められている6物質(塩化ビニルモノマー、1,3-ブタジエン、アクリロニトリル、クロロホルム、1,2-ジクロロエタン、水銀及びその化合物)については、基準値や指針値及び対照地点と比較し、その他の36物質については、対照地点と比較した。その結果は、次のとおりであった。

なお、46物質のうち、測定回数を年1回とした14物質については8月に実施した。

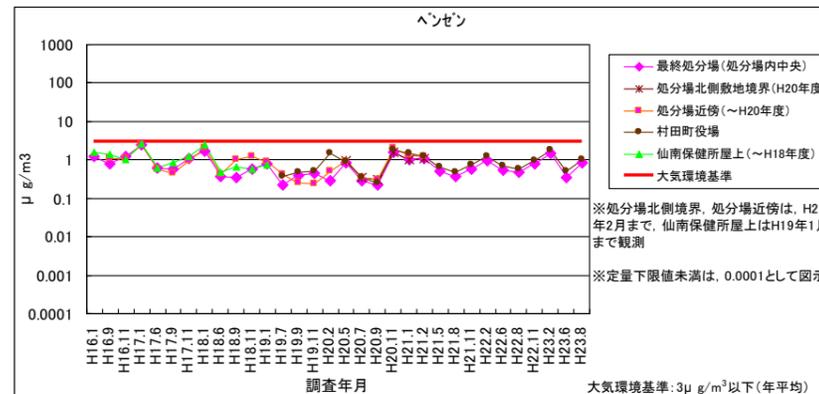
- 処分場内の調査地点における環境基準が定められている4物質(ジクロロメタン、ベンゼン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン)の濃度は、いずれも環境基準を満たしており、また、対照地点と同程度の値であった。
- 処分場内の調査地点における指針値が定められている6物質(塩化ビニルモノマー、1,3-ブタジエン、アクリロニトリル、クロロホルム、1,2-ジクロロエタン、水銀及びその化合物)の濃度は、いずれも指針値を満たしており、また、対照地点と同程度の値であった。
- 処分場内の調査地点における硫化水素濃度は、定量下限値(0.0002ppm)未満であり、対策工事实施後は定量下限値未満の状況が続いている。
- 処分場内の調査地点における環境基準等が定められていない36物質の濃度は、いずれも対照地点と同程度の値であった。



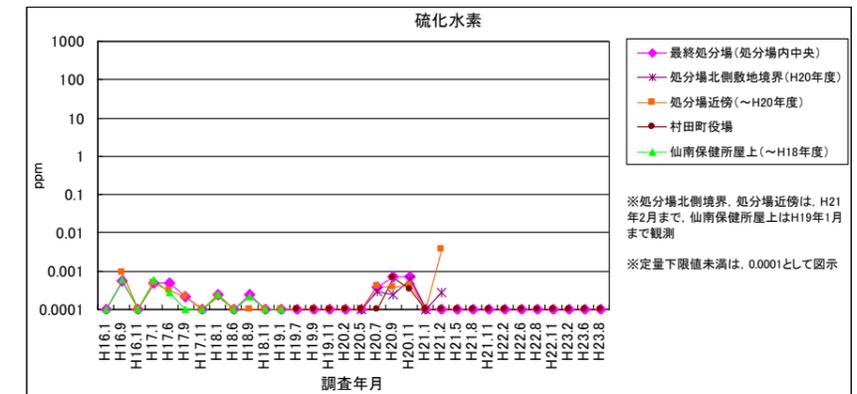
ジクロロメタン



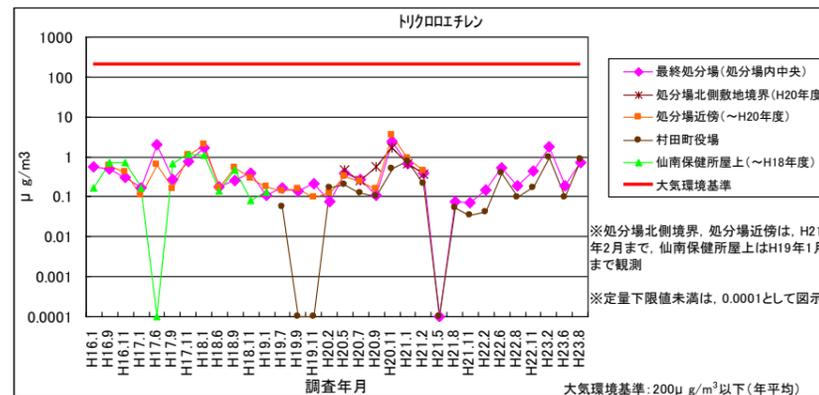
テトラクロロエチレン



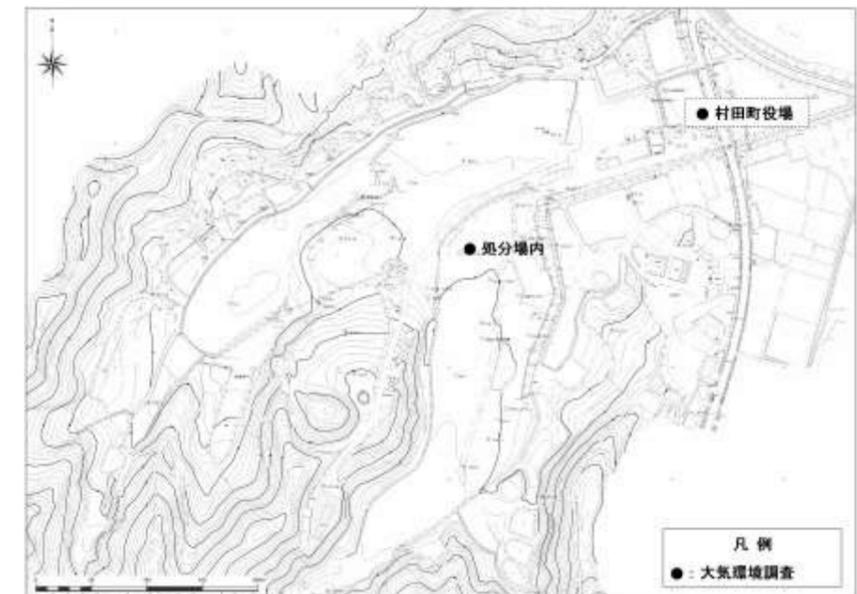
ベンゼン



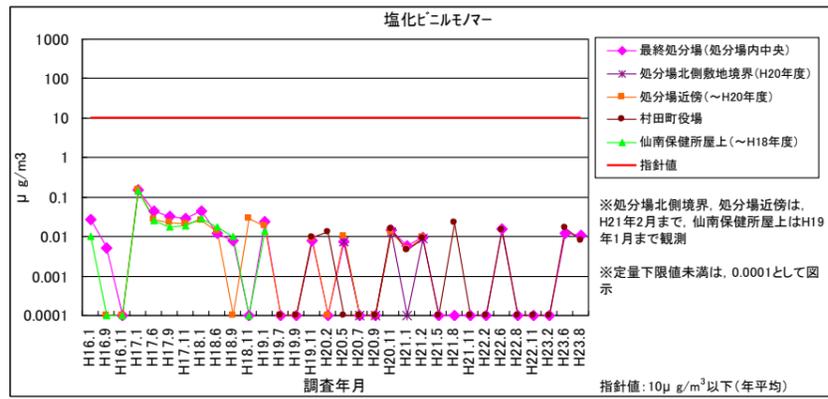
硫化水素



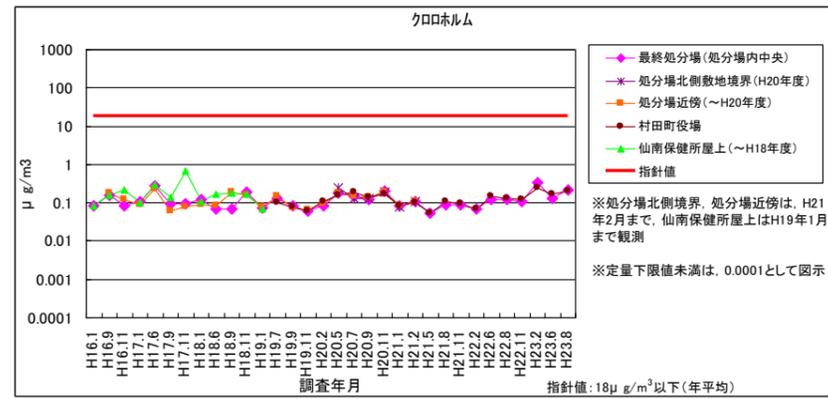
トリクロロエチレン



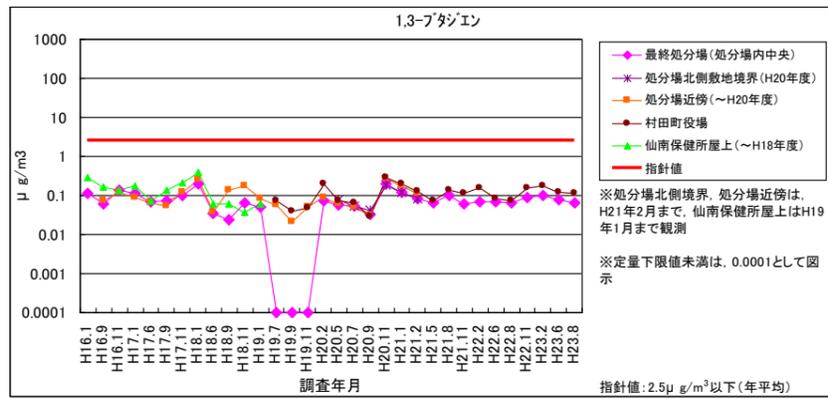
大気環境調査地点図



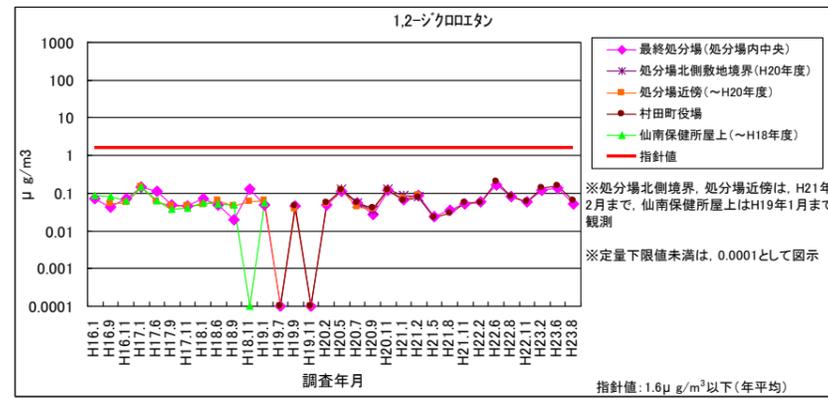
塩化ビニルモノマー



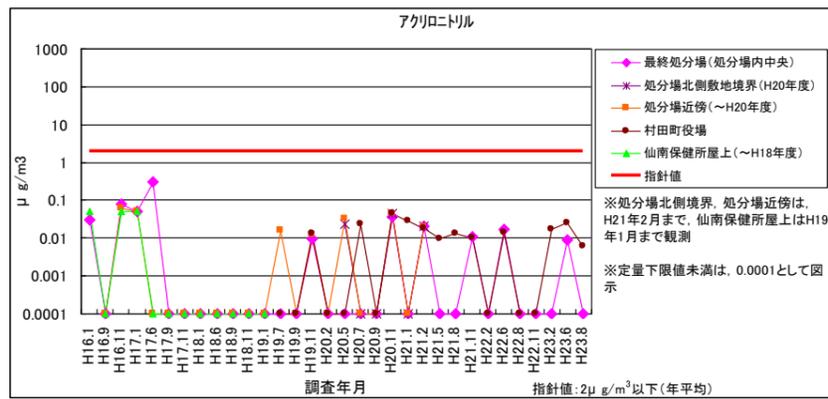
クロロホルム



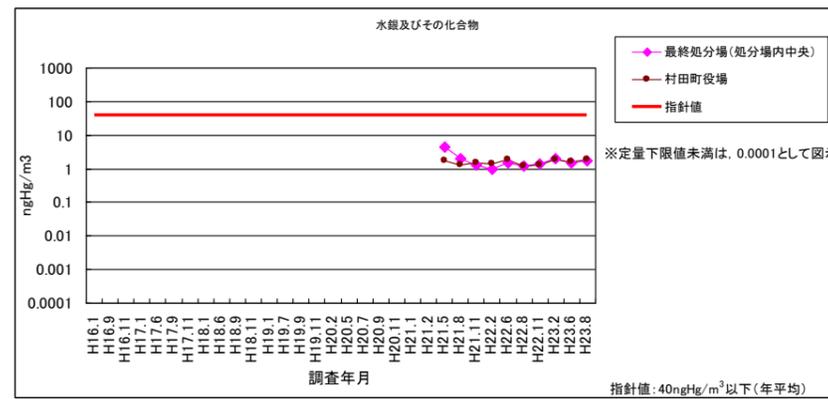
1, 3-ブタジエン



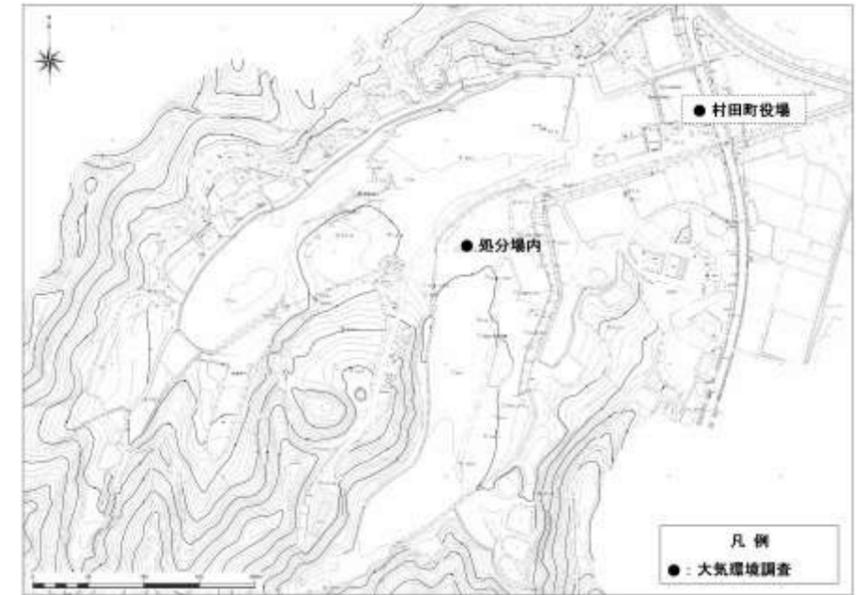
1, 2-ジクロロエタン



アクリロニトリル



水銀及びその化合物



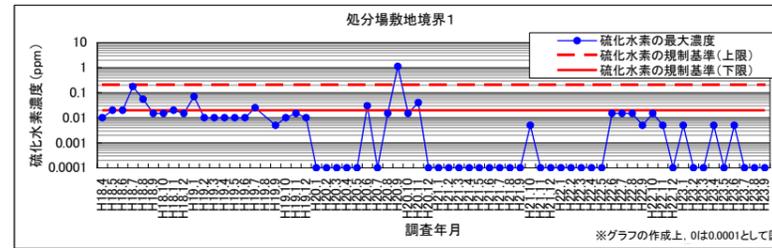
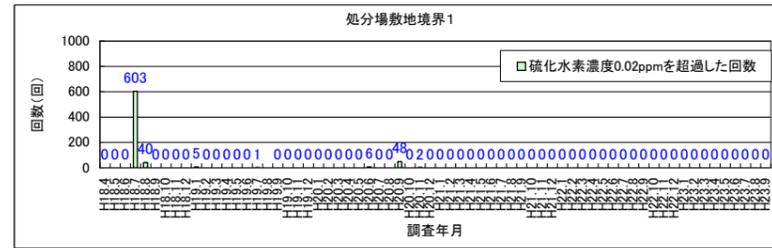
大気環境調査地点図

## 2.1.2 硫化水素連続調査

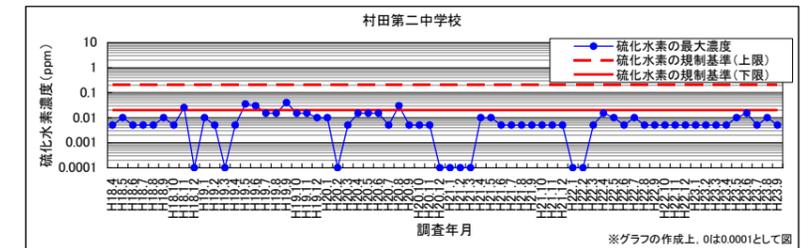
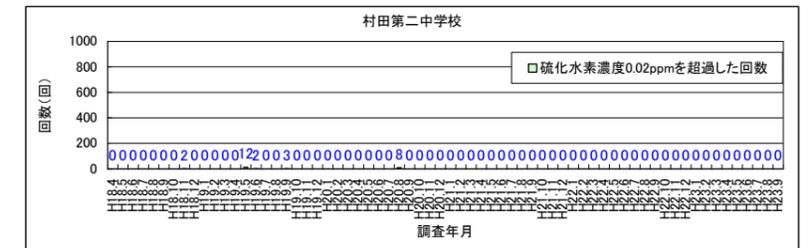
硫化水素による生活環境保全上の支障の有無を把握するため、処分場の敷地境界 2 地点と村田第二中学校 1 地点の合計 3 地点において、調査期間中 30 秒毎に 24 時間連続で硫化水素を測定した。

村田町竹の内地区は、悪臭防止法に基づく規制は適用されていないが、この法令を準用し、硫化水素の規制基準として示される濃度範囲(臭気強度 2.5(0.02ppm)～3.5(0.2ppm))のうち最も低い(厳しい)濃度である 0.02ppm を基準濃度として処分場等の濃度と比較した。その結果は以下のとおりであった。

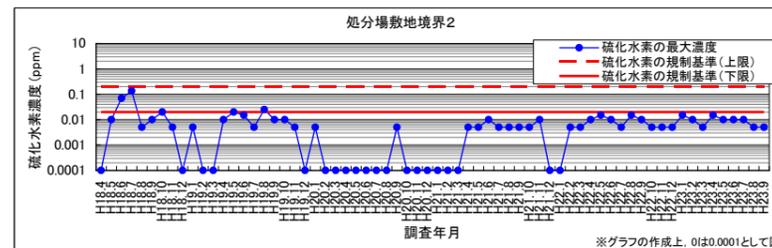
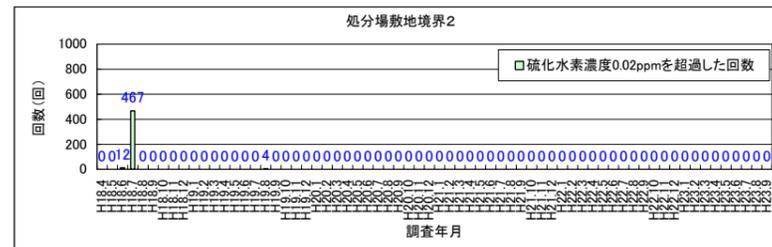
- 3 地点の最大濃度は処分場敷地境界 1 で 0.005ppm、処分場敷地境界 2 及び村田第二中学校で 0.015ppm であり、平成 21 年 4 月以降において 0.02ppm 以上の濃度は測定されていない。



硫化水素連続調査 (処分場敷地境界 1)



硫化水素連続調査 (村田第二中学校)



硫化水素連続調査 (処分場敷地境界 2)



硫化水素連続調査地点図

### 2.1.3 放流水及び河川水水質調査

処分場からの放流水による生活環境保全上の支障の有無を把握するため、放流水1地点と河川水2地点(放流水と河川水が合流する地点よりも上流側の地点と下流側の地点)で7月と9月に水質調査を実施した。その結果は、次のとおりであった。

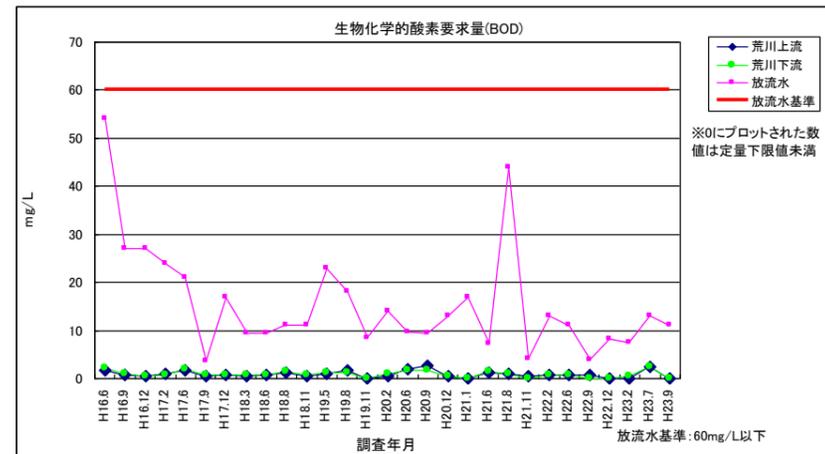
なお、測定回数を年1回測定とした17項目については9月に実施した。

- 処分場からの放流水の水質は、分析した全項目で廃棄物処理法に定める放流水の基準に適合していた。
- 平成23年から放流水の測定項目に追加した溶存酸素量は、7月に7.2 mg/L(飽和度91%<sup>※1</sup>)、9月に7.7mg/L(飽和度88%<sup>※2</sup>)であった。
- 1,4-ジオキサンは放流水の水質基準項目にはないが、7月に0.020 mg/L、9月に0.014 mg/L 検出されている。
- 河川水の水質は、荒川上流と荒川下流で同程度の値を示した。
- 試料採取時における放流水と河川水の流量を単純に比較すると、放流水は荒川で約1,000倍以上希釈されていることとなる。

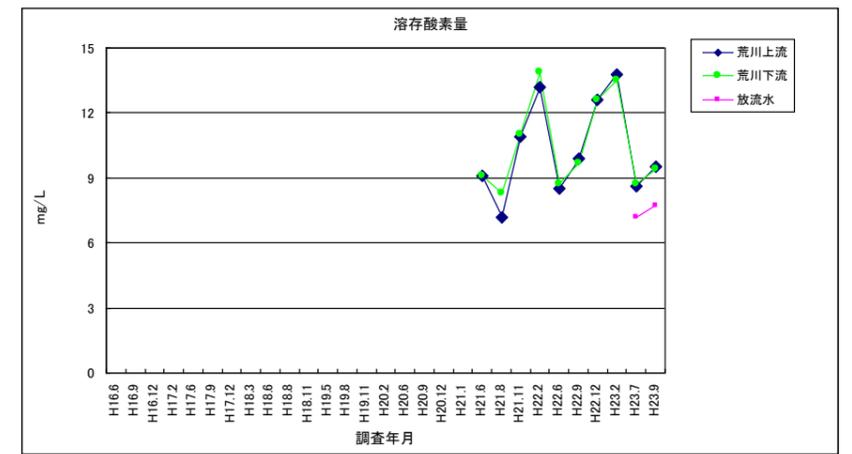
※1 試料水採取時の水温26.6℃の飽和溶存酸素量<sup>※3</sup>7.91 mg/Lに対する溶存酸素量の割合  
 ※2 試料水採取時の水温20.5℃の飽和溶存酸素量<sup>※3</sup>8.76 mg/Lに対する溶存酸素量の割合  
 ※3 蒸留水一気圧下における飽和溶存酸素量



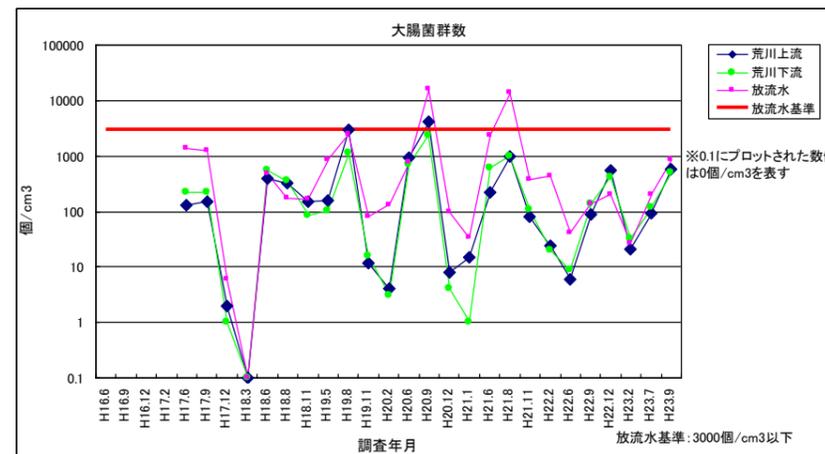
放流水及び河川水の水質調査地点図



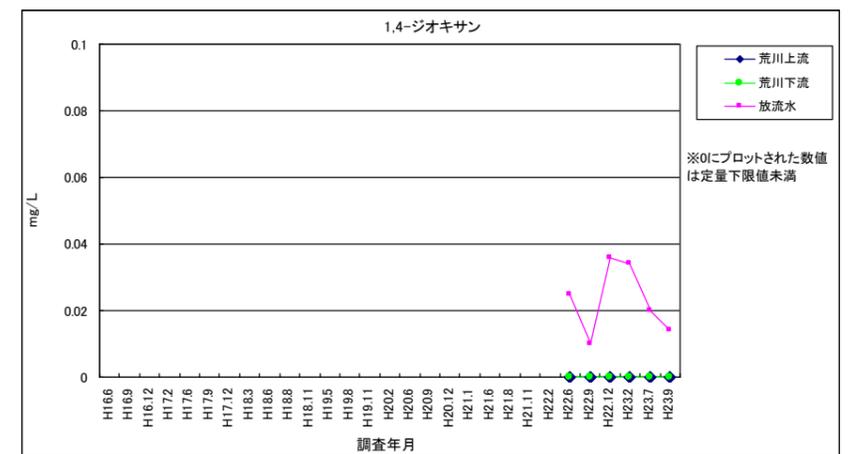
生物化学的酸素要求量 (BOD)



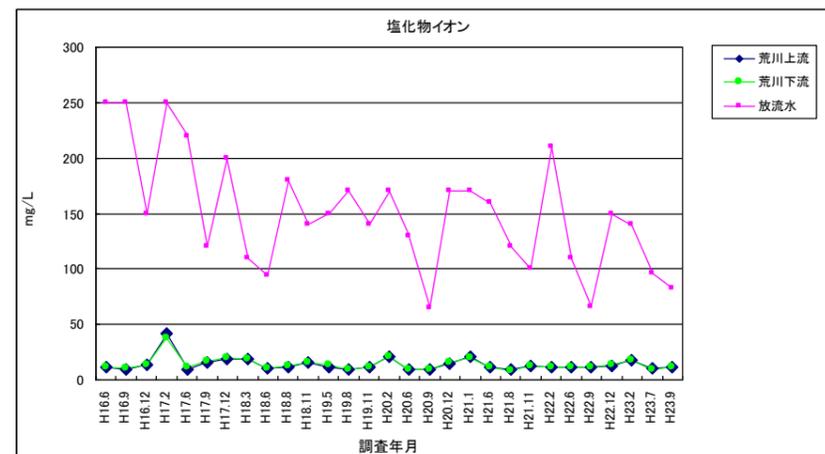
溶存酸素量



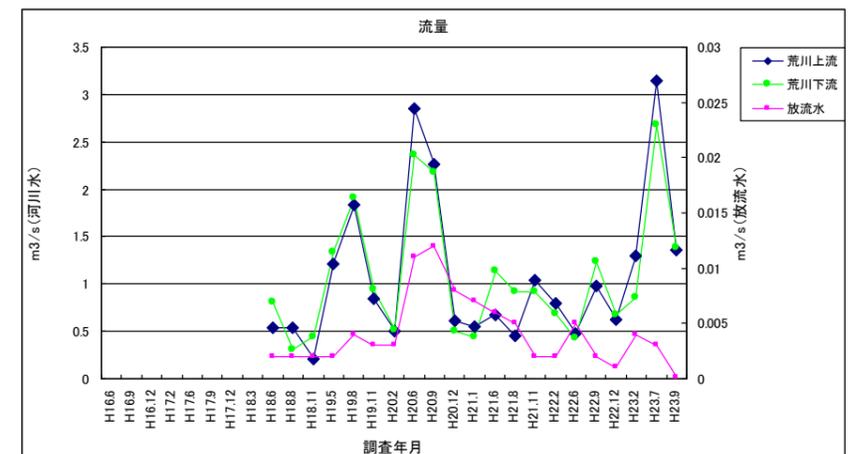
大腸菌群数



1,4-ジオキサン



塩化物イオン



流量

## 2.2 処分場内廃棄物により汚染された浸透水の地下水への拡散又はそのおそれの把握に関する環境モニタリング

### 2.2.1 浸透水及び地下水水質調査

処分場内の廃棄物により汚染された浸透水の地下水への拡散又はそのおそれを把握するため、処分場内の浸透水観測井戸9地点(No. 3, No. 5, H16-3, H16-5, H16-6, H16-10, H16-11, H16-13, H17-15)及び処分場周辺の地下水観測井戸4地点(Loc. 1A, Loc. 1B, Loc. 3, H17-19), 合計13地点で6月と9月に水質調査を実施した。その結果は、次のとおりであった。

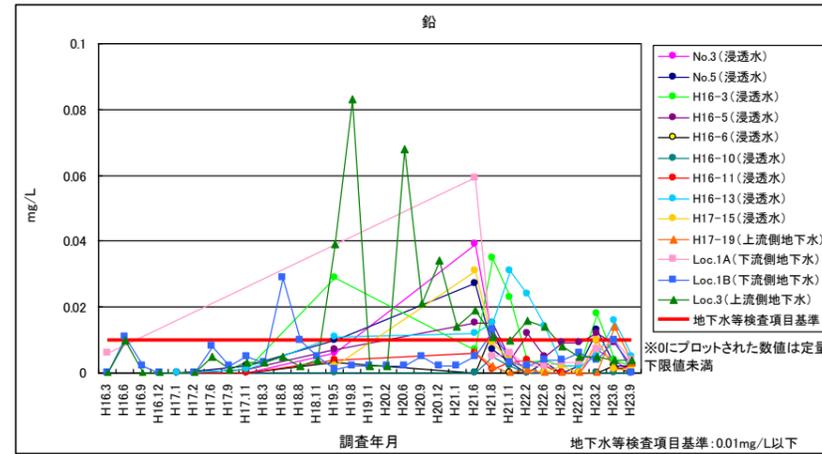
なお、測定回数を年1回とした17項目については9月に実施した。

#### (1) 処分場内の浸透水

- 廃棄物処理法に定める地下水等検査項目基準等が適用される項目については、鉛及び砒素がH16-13で、ベンゼンがNo.5, H16-13で、BODがH16-13で当該基準に適合しなかった。
- その他の項目のうち地下水環境基準が適用される項目については、ほう素及びふっ素がH16-5を除く全ての地点で、1,4-ジオキサンがH16-13で、ダイオキシン類がH16-3, H16-5, H16-13で基準に適合しなかった。
- 平成22年11月にダイオキシン類が110pg-TEQ/L(浮遊物質量140mg/L)を示したH16-5は、10月の調査では25pg-TEQ/L(浮遊物質量79mg/L)であった。
- 1,4-ジオキサンは平成22年度から測定を開始したが、すべての地点で検出されていることからその挙動を注視する必要がある。
- 平成23年度から測定項目に追加した硫化物イオンは、5地点で検出(定量下限値0.1mg/L)され、その濃度範囲は0.2~9.6mg/Lで、最大値を示した地点はH16-5であった。

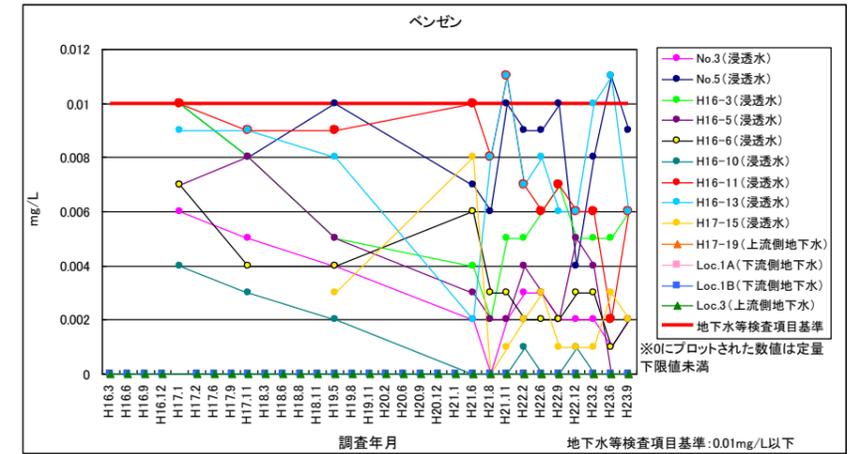
#### (2) 処分場周辺の地下水

- 処分場上流側観測井戸(Loc. 3, H17-19)及び処分場下流側観測井戸(Loc. 1A, Loc. 1B)の地下水は、H17-19の鉛及び砒素を除き地下水等検査項目基準等及び地下水環境基準に適合しており、上昇傾向は認められなかった。
- 処分場上流側観測井戸H17-19では、鉛及び砒素が地下水環境基準を超える値で検出された。特に、6月の調査時は試料水の浮遊物質量が540mg/Lと高く、土粒子等の浮遊物質が影響したものと推定される。



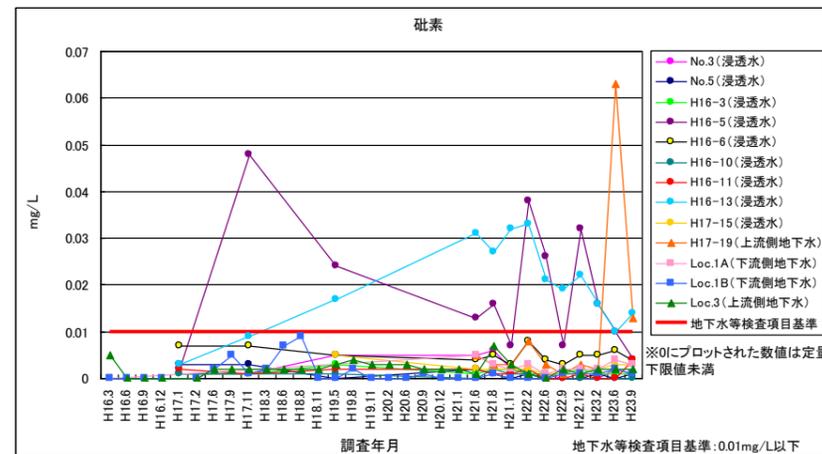
※Loc.1BのH18.8以前と、Loc.3のH19.8以前は事業者設置井戸によるもの

#### 鉛



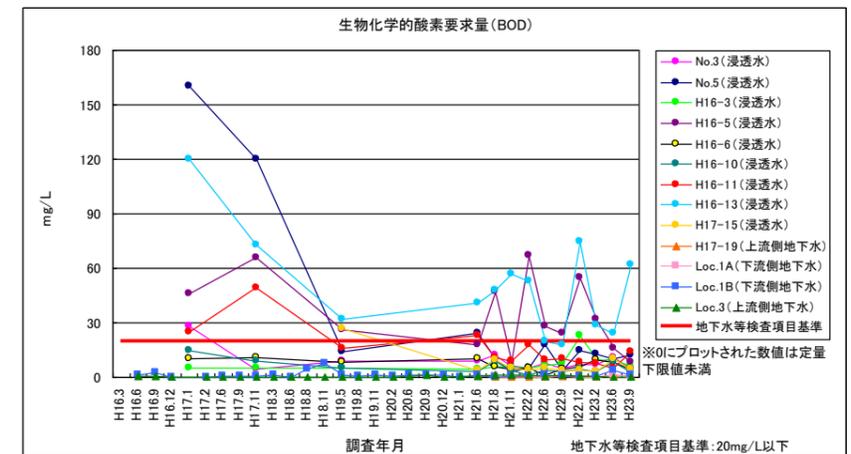
※Loc.1BのH18.8以前と、Loc.3のH19.8以前は事業者設置井戸によるもの

#### ベンゼン



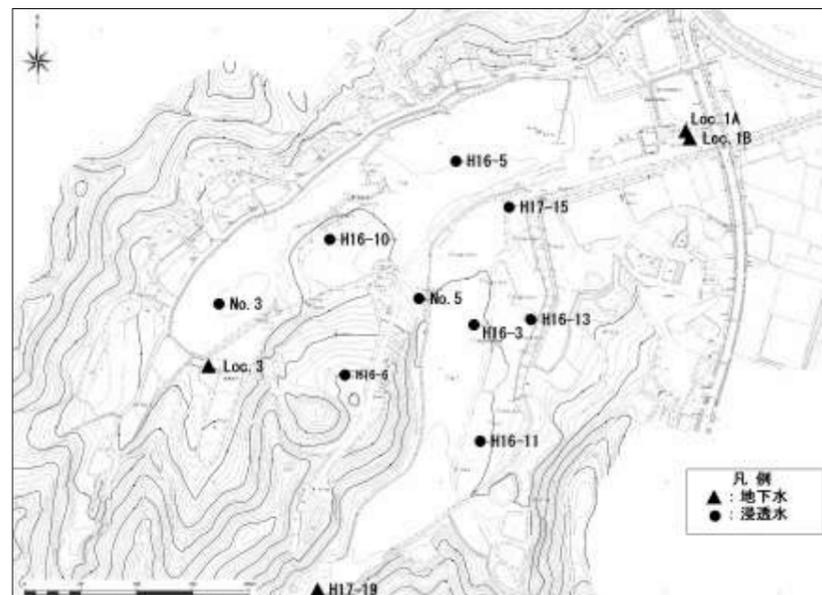
※Loc.1BのH18.8以前と、Loc.3のH19.8以前は事業者設置井戸によるもの

#### 砒素

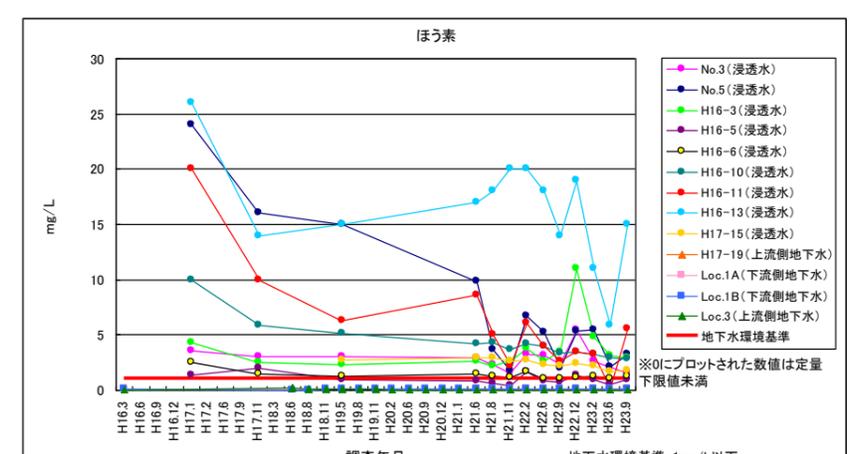


※Loc.1BのH18.8以前と、Loc.3のH19.8以前は事業者設置井戸によるもの

#### 生物学的酸素要求量 (BOD)

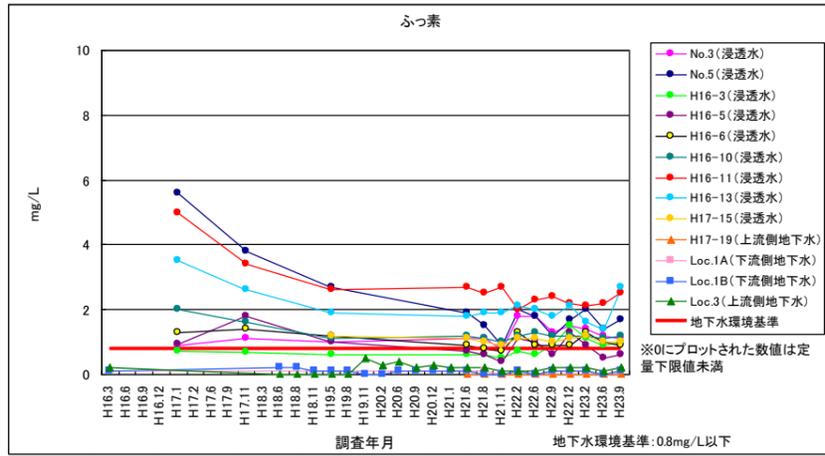


浸透水及び地下水水質調査地点図

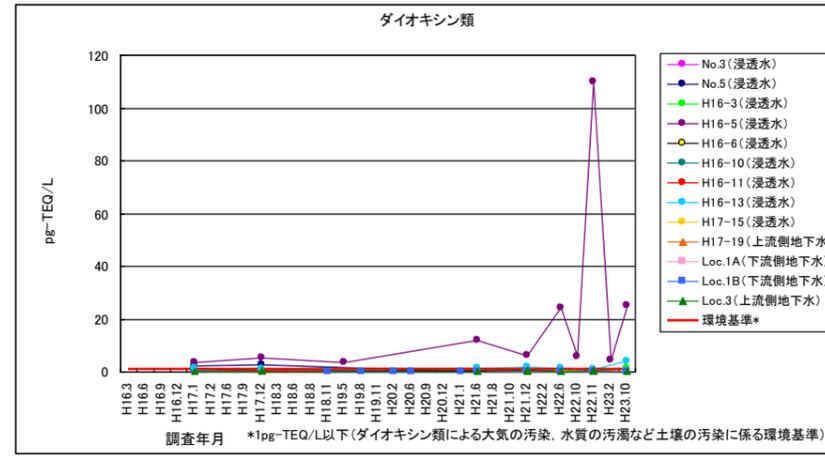


※Loc.1BのH18.8以前と、Loc.3のH19.8以前は事業者設置井戸によるもの

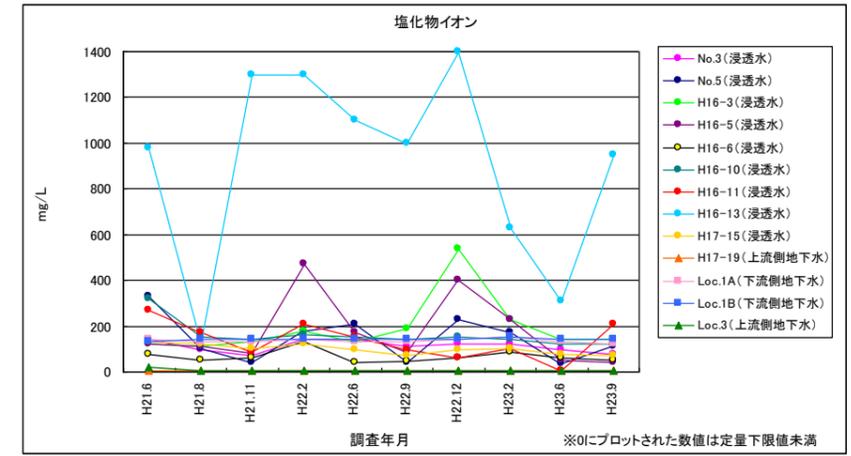
#### ほう素



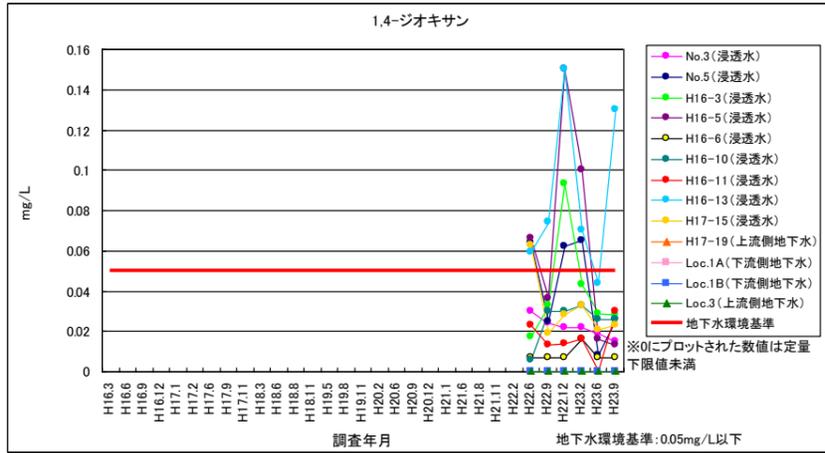
ふっ素



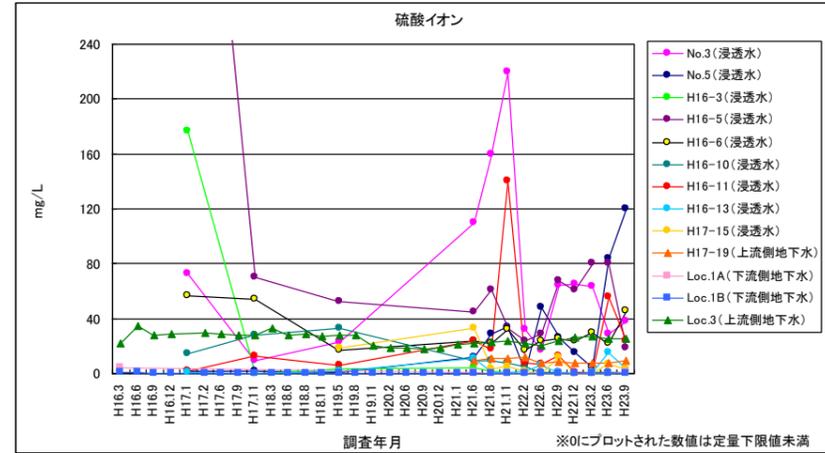
ダイオキシン類



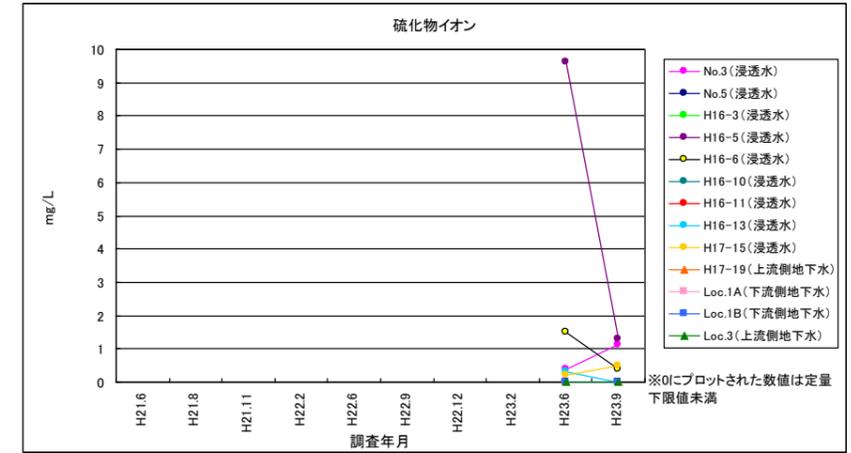
塩化物イオン (H21年度～)



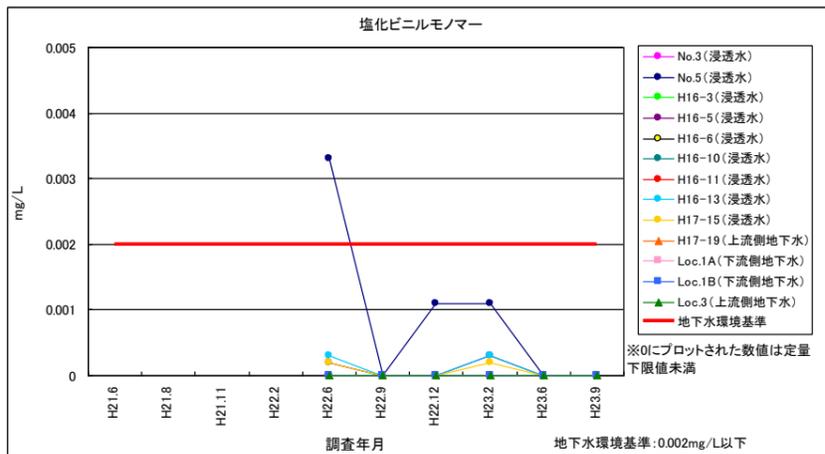
1,4-ジオキサン



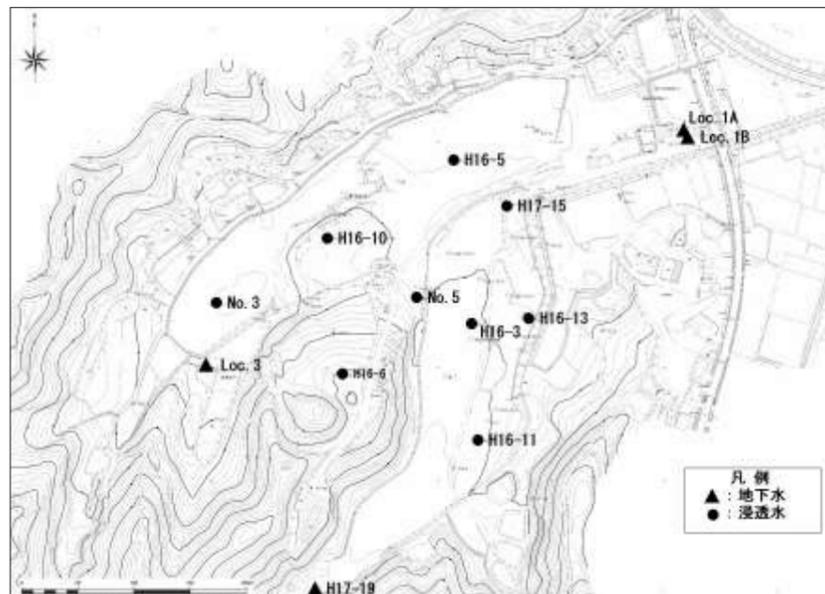
硫酸イオン (H21年度～)



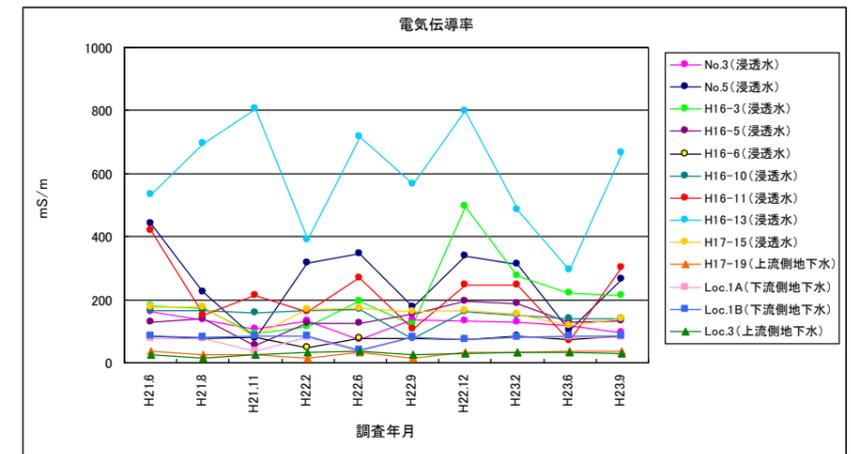
硫化物イオン



塩化ビニルモノマー



浸透水及び地下水水質調査地点図



電気伝導率 (H21年度～)

## 2.3 処分場内の状況把握に関する環境モニタリング

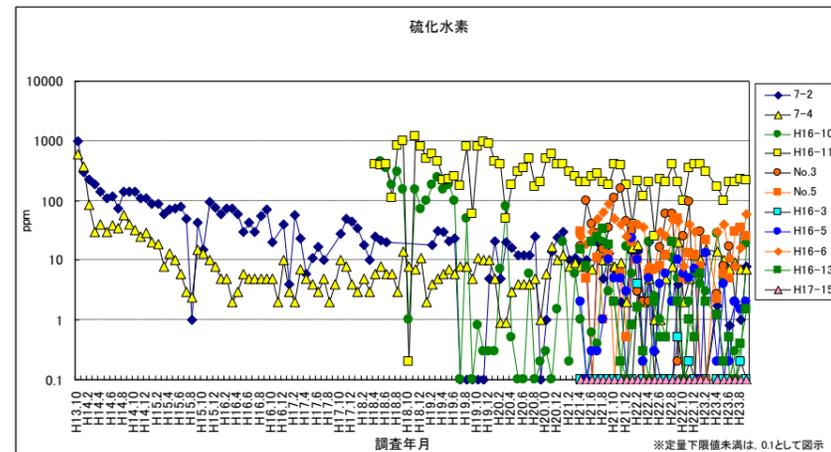
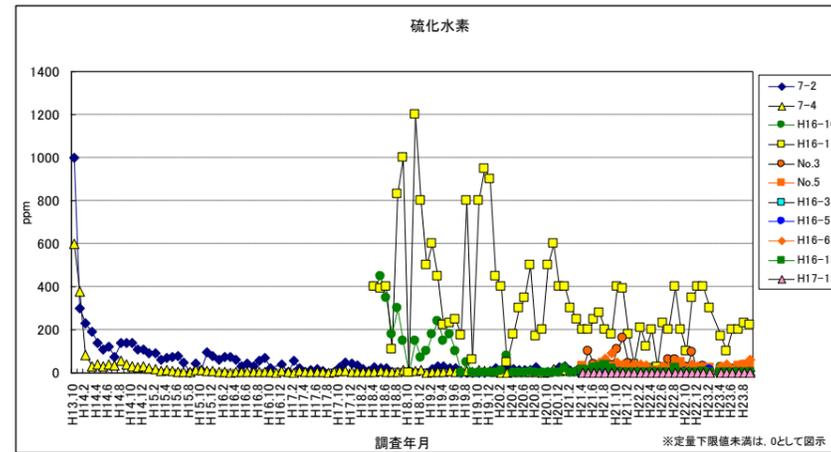
### 2.3.1 発生ガス等調査・下流地下水状況調査・放流水状況調査

処分場の状況を確認するため、処分場内の観測井戸 11 地点 (No. 3, No. 5, H16-3, H16-5, H16-6, H16-10, H16-11, H16-13, H17-15, 7-2, 7-4) で硫化水素等の発生ガスや浸透水について調査を毎月実施した。また、平成 23 年度から新たに下流地下水状況調査として処分場下流側の観測井戸 2 地点 (Loc. 1A, Loc. 1B) で、放流水状況調査として 1 地点 (放流水採取地点) で水質調査を毎月実施した。その結果は、次のとおりであった。

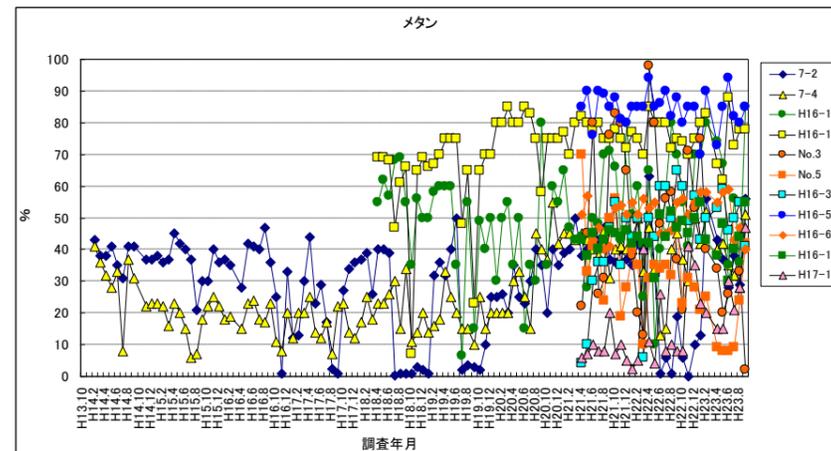
#### (1) 発生ガス

- 硫化水素濃度は、H16-11 で 100~230ppm と他の地点に比べ高い値を示し、その他の地点ではいずれも 100ppm 以下であった。測定初期 (平成 13 年度, 平成 18 年度) と比較すると低下しており、平成 21 年度と比較すると横ばい傾向であった。
- メタン濃度は 2~94% の範囲で測定され、H16-5 で最大 94% を示したほか、H16-10, H16-11 は、他の地点よりメタン濃度が高い傾向を示した。
- 発生ガス量は、H16-5 で 7 月の調査時に 1 分あたり 1.8L と高い値を示し、その後 1 分あたり 0.4~0.7L の間で変動していた。また、H16-6 が 8 月に 1 分あたり 1.5L の高い値を示した。その他の観測井戸は、1 分間あたり 1L 以下であった。

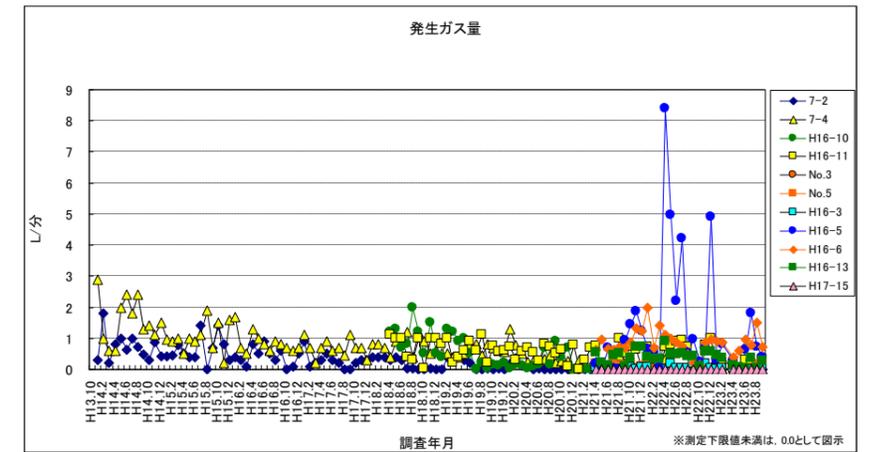
なお、No.3 及び No.5 は以前から時々浸透水が噴出する事象が発生しているが、平成 23 年度上半期では、4 月 7 日の地震直後に No.3 で、5 月 11 日の発生ガス等調査時に No.5 で当該事象が発生した。



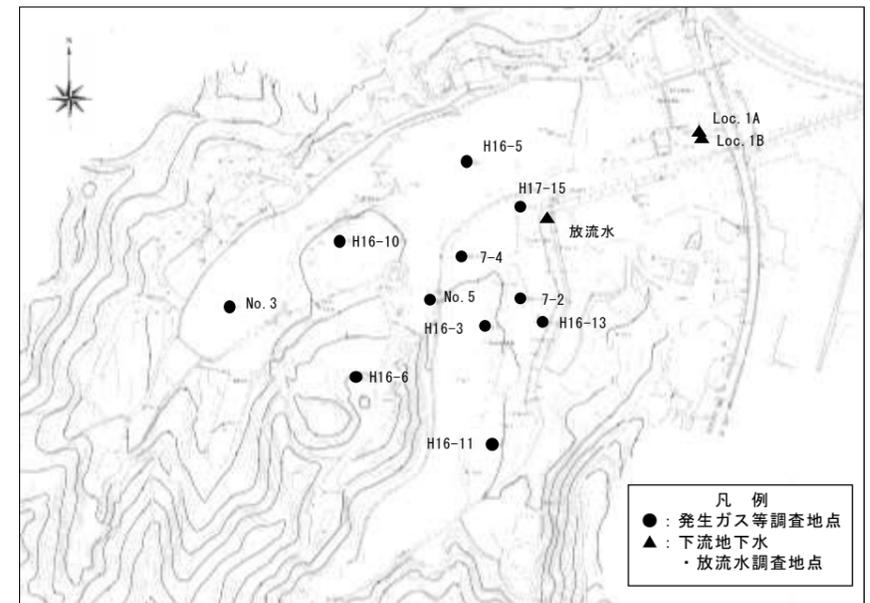
硫化水素 (管頭下 1m で測定) ※下図: 対数表示



メタン (管頭下 1m で測定)



発生ガス量



発生ガス等調査・下流地下水状況調査・放流水状況調査地点図

(2) 浸透水

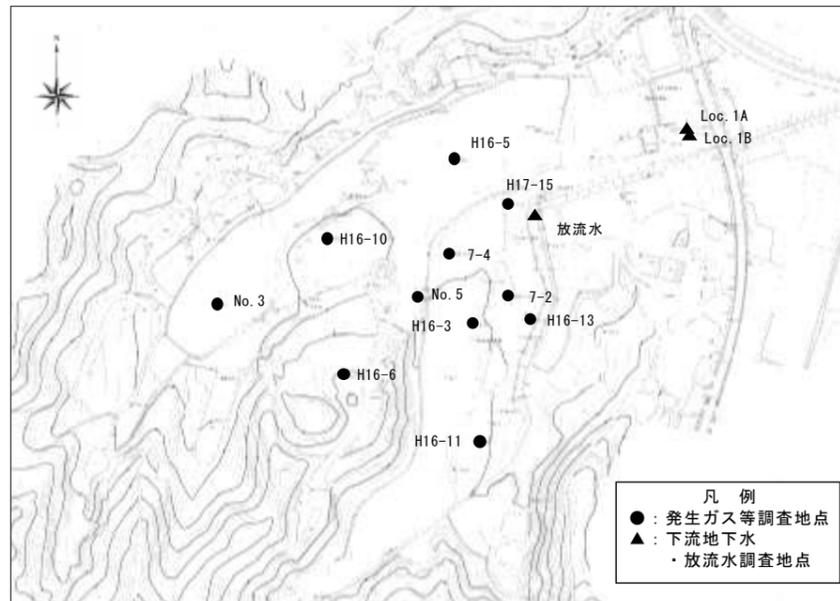
- 硫酸イオン濃度は変動が大きく、比較的高い値を示した地点の変動範囲は H16-5 で 17~160 mg/L, H16-11 で 0.1~140 mg/L, No.5 で 0.4~120 mg/L であった。
- 塩化物イオンの濃度は, H16-13 で 600 ~1,300mg/L と他の地点に比べ高い値を示した。次いで H16-5 で最大 460mg/L, H16-11 で最大 300mg/L の値を示し, 変動しながら推移した。なお, その他の地点では概ね 200mg/L 以下の濃度で推移していた。

(3) 下流地下水

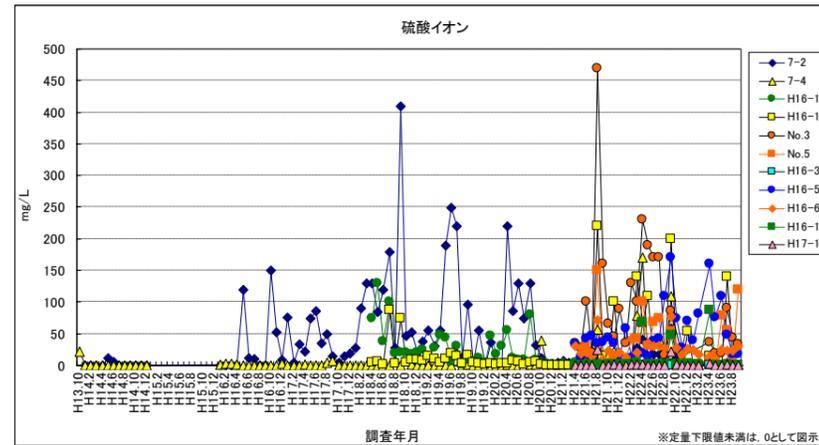
- Loc. 1A, Loc. 1B とともに, 硫酸イオン濃度が 1 mg/L 未満, 電気伝導率が約 80mS/m で安定した推移を示し, 塩化物イオン濃度が 130~170mg/L の範囲で推移した。

(4) 放流水

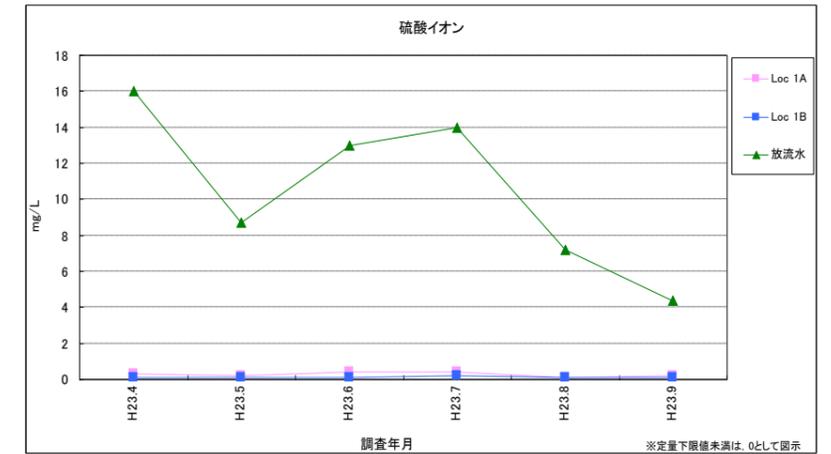
- 硫酸イオン濃度は 4.4~16 mg/L で推移し, 塩化物イオン濃度は 110~170mg/L で推移した。電気伝導率は 120~170mS/m の間で推移した。



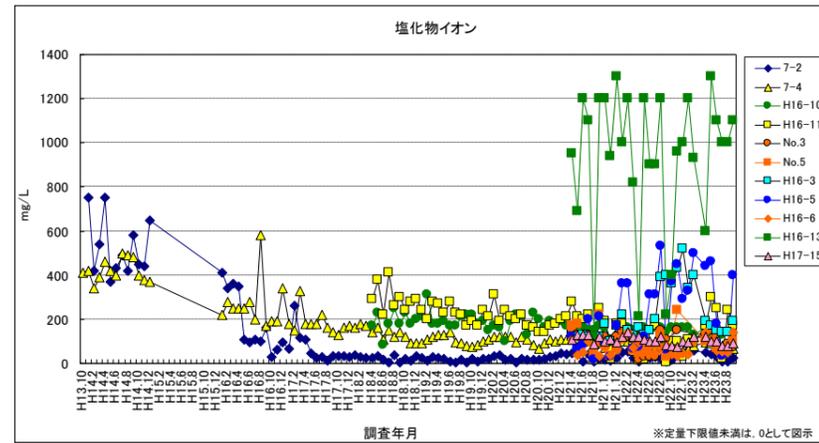
発生ガス等調査・下流地下水状況調査・放流水状況調査地点図



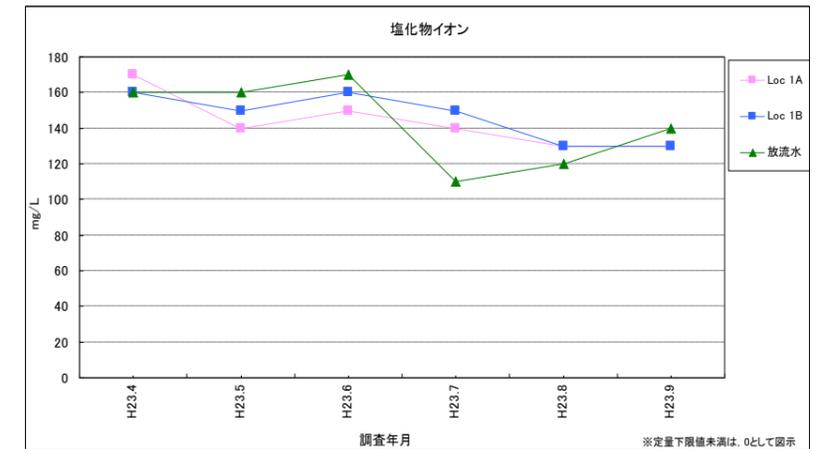
硫酸イオン（浸透水）



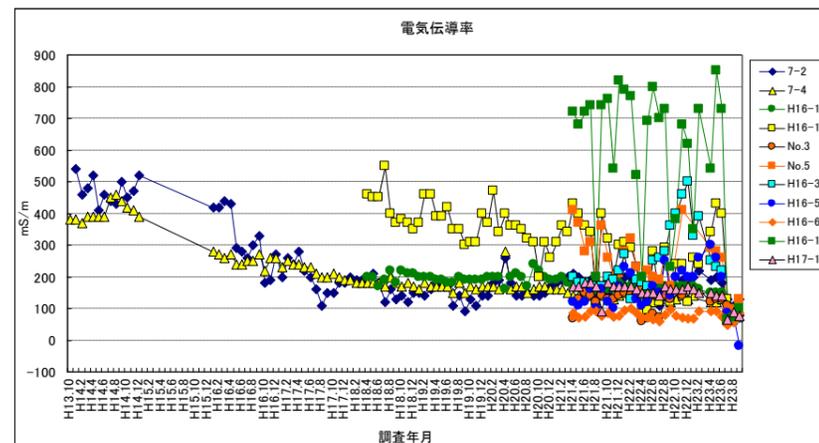
硫酸イオン（下流地下水・放流水）



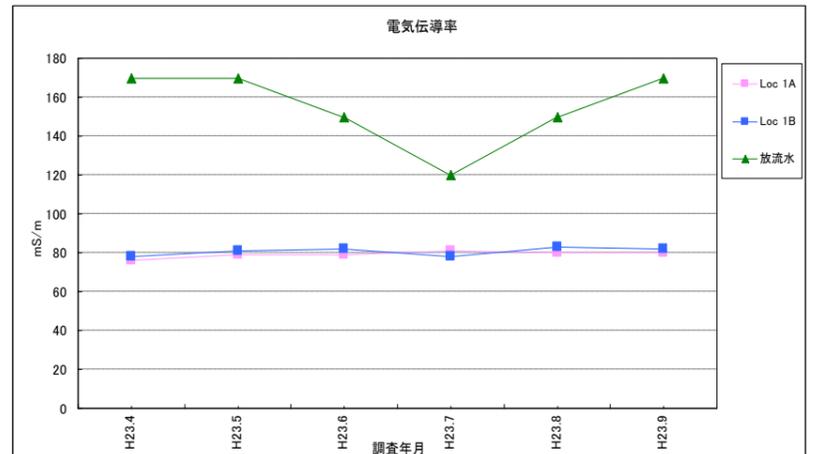
塩化物イオン（浸透水）



塩化物イオン（下流地下水・放流水）



電気伝導率（浸透水）



電気伝導率（下流地下水・放流水）

### 2.3.2 地中温度及び地下水位調査

廃棄物埋立区域内外の地中温度及び地下水位の状況を把握するために、浸透水観測井戸9地点(No. 3, No. 5, H16-3, H16-5, H16-6, H16-10, H16-11, H16-13, H17-15)及び、地下水観測井戸5地点(Loc. 1A, Loc. 1B, Loc. 3, Loc. 4, H17-19), 合計14地点の地中温度と、地下水位の変動を調査した。地中温度は7月と9月に実施し、地下水位変動は調査期間中1時間毎に連続測定した。その結果は、次のとおりであった。

なお、浸透水観測井戸は、廃棄物層の下限(難透水性岩盤層より上側)まで掘削している。

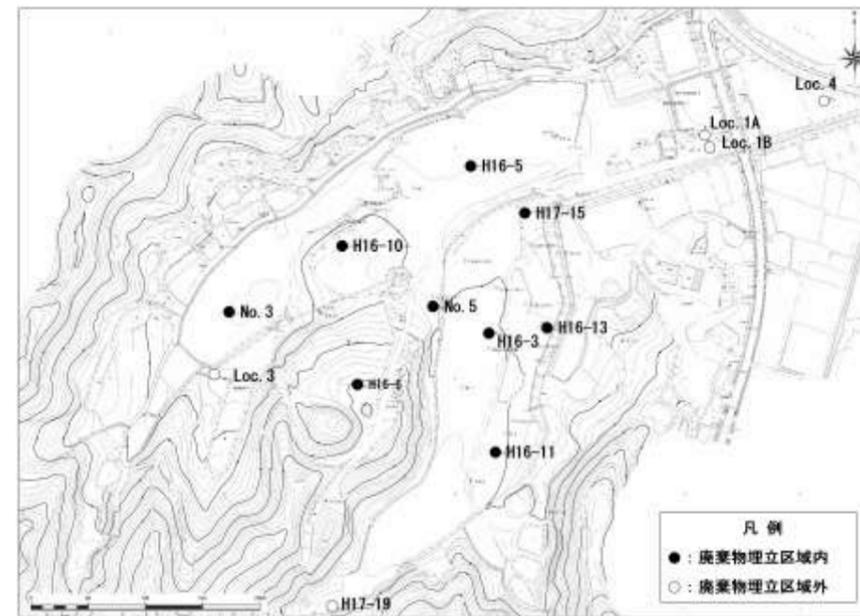
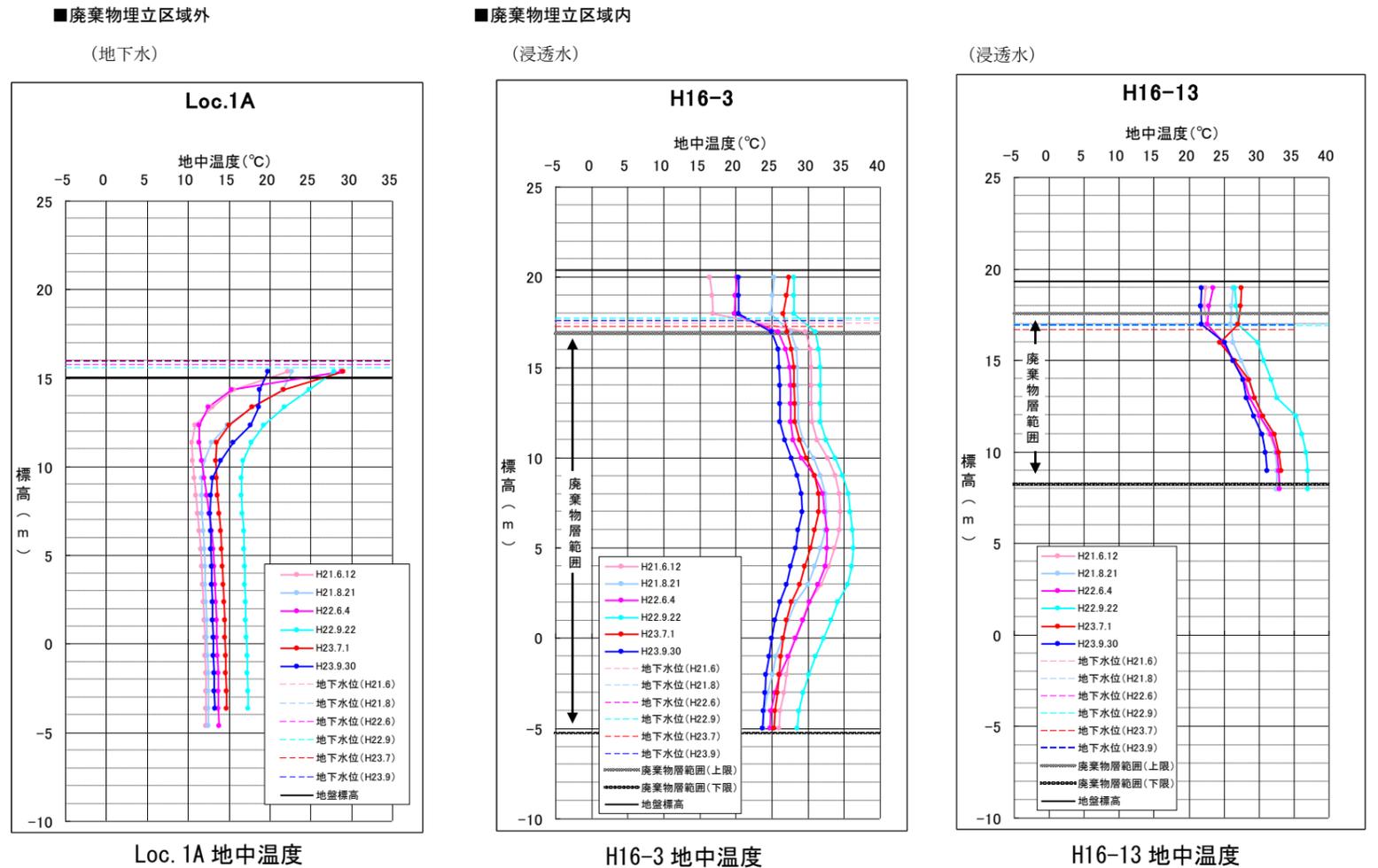
#### (1) 地中温度

■ 7月の調査では、廃棄物埋立区域外の調査地点のうち、最も深い観測井戸である Loc. 1A の最高温度<sup>※</sup>は 14.7℃(深度 19~20m, 標高-2.66m~-3.66m)であった。また、廃棄物埋立区域内の調査地点のうち、最も温度が高かった地点は、平成22年度上半期(6月)では H16-13 で 33.0℃(深度 12m, 標高 7.94m)であったが、7月の調査では H16-13 で 33.2℃(深度 11m, 標高 8.94m)であり、Loc. 1A との温度差は 18.5℃であった。次に高かった地点は H16-3 で 31.5℃(深度 13~14m, 標高 7.97~8.97m)であり、Loc. 1A との温度差は 16.8℃であった。

■ 9月の調査では、廃棄物埋立区域外の調査地点のうち、最も深い観測井戸である Loc. 1A の最高温度<sup>※</sup>は 13.3℃(深度 20m, 標高 -3.66m)であった。また、廃棄物埋立区域内の調査地点のうち、最も水温が高かった地点は、平成22年度上半期(9月)では H16-13 で 37℃(深度 11~12m, 標高 8.94m~7.9m)であったが、9月の調査では H16-13 で 31.2℃(深度 11m, 標高 8.94m)であり、Loc. 1A との温度差は 17.9℃であった。次に高かった地点は H16-3 で 29.2℃(深度 14m, 標高 8.97m)であり、Loc. 1A との温度差は 15.9℃であった。

■ 廃棄物埋立区域内の H16-13 の地中温度が廃棄物埋立区域外の地中温度よりも 20℃近く高いことから、廃棄物埋立区域の内部では、微生物による廃棄物の分解反応が継続していると考えられる。

※ 地表からの影響を受けにくいと思われる管頭からの深度 10m 以下における最高温度



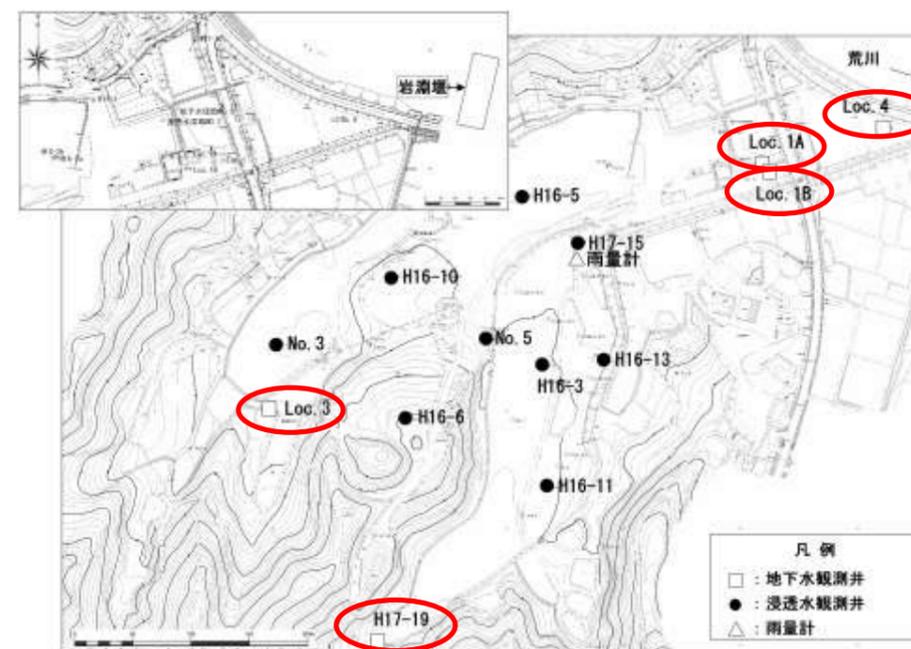
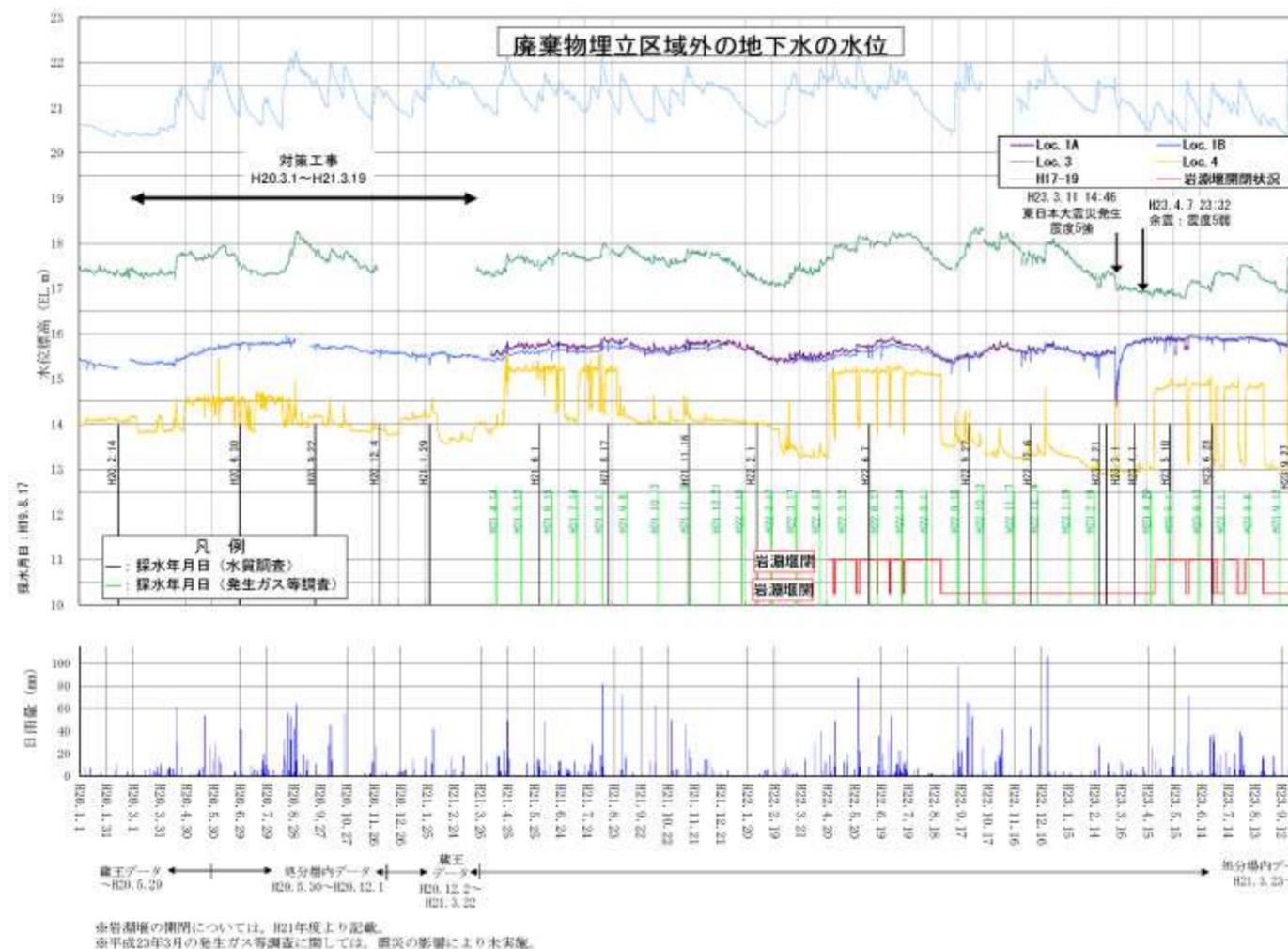
(2) 地下水位調査

- 廃棄物埋立区域外の地下水の水位は、上流側は標高 16.78～22.09mの間で変動し、Loc. 3 では最大 0.91mの高低差であった。また、下流側は標高 15.77～16.49mの間で変動し、Loc. 1A では最大 0.72mの高低差であった。
- 廃棄物埋立区域内の地下水の水位は、上流側は標高 16.35～18.28mの間で変動し、H16-6 では最大 1.31mの高低差であった。また、下流側は標高 16.34～18.02mの間で変動し、H17-15 では最大 0.73mの高低差であった。
- 処分場内の浸透水は、上流側と下流側の水位が逆転していないことから、上流側から下流側へ流下しているものと推察される。

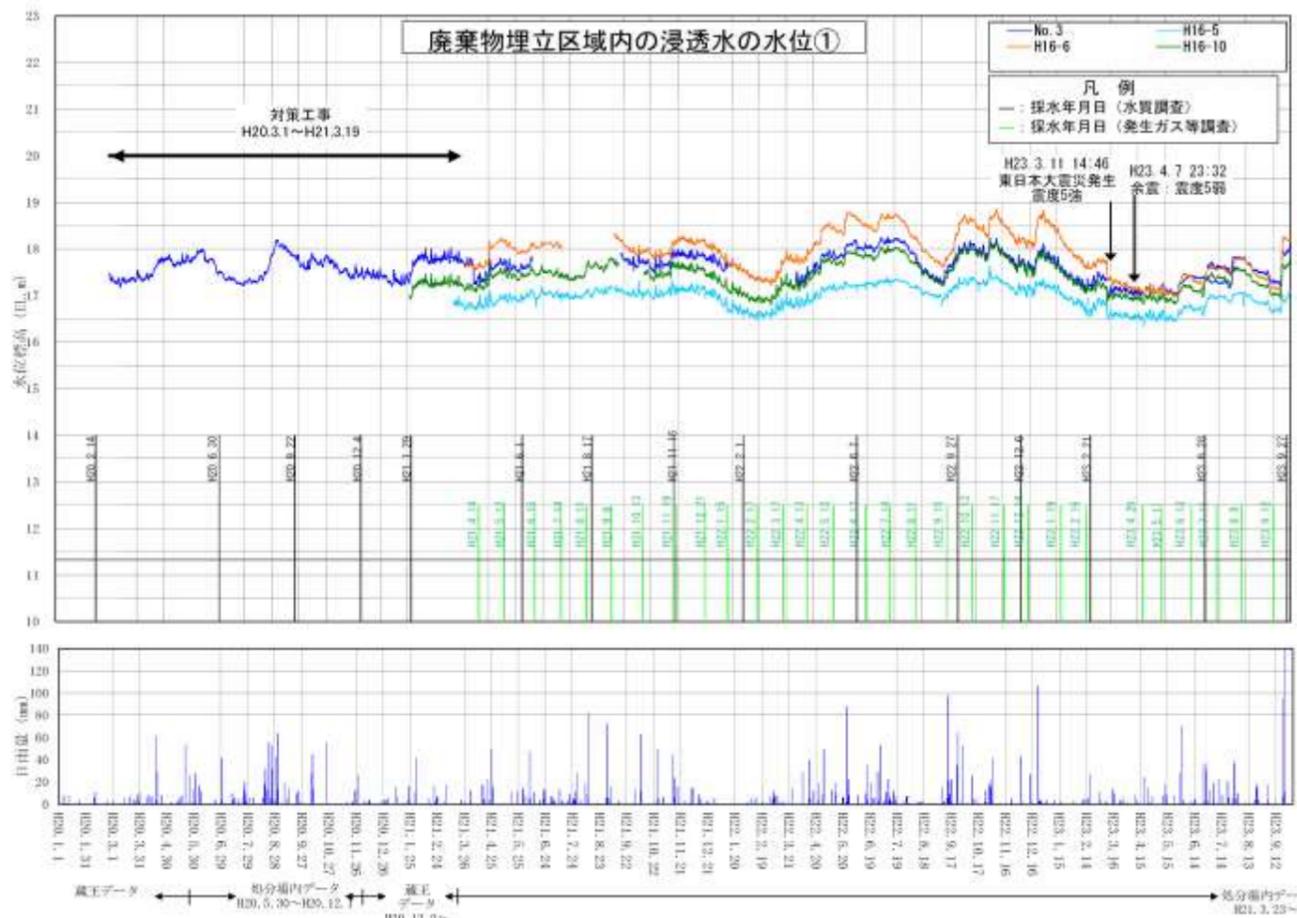
なお、12月に実施した水準測量の結果、平成23年3月の大地震で処分場を含む地域が広範囲に渡って地盤標高が低下していることが明らかとなったが、地下水位は地震前の地盤標高を基に算定している。

地盤標高一覧表

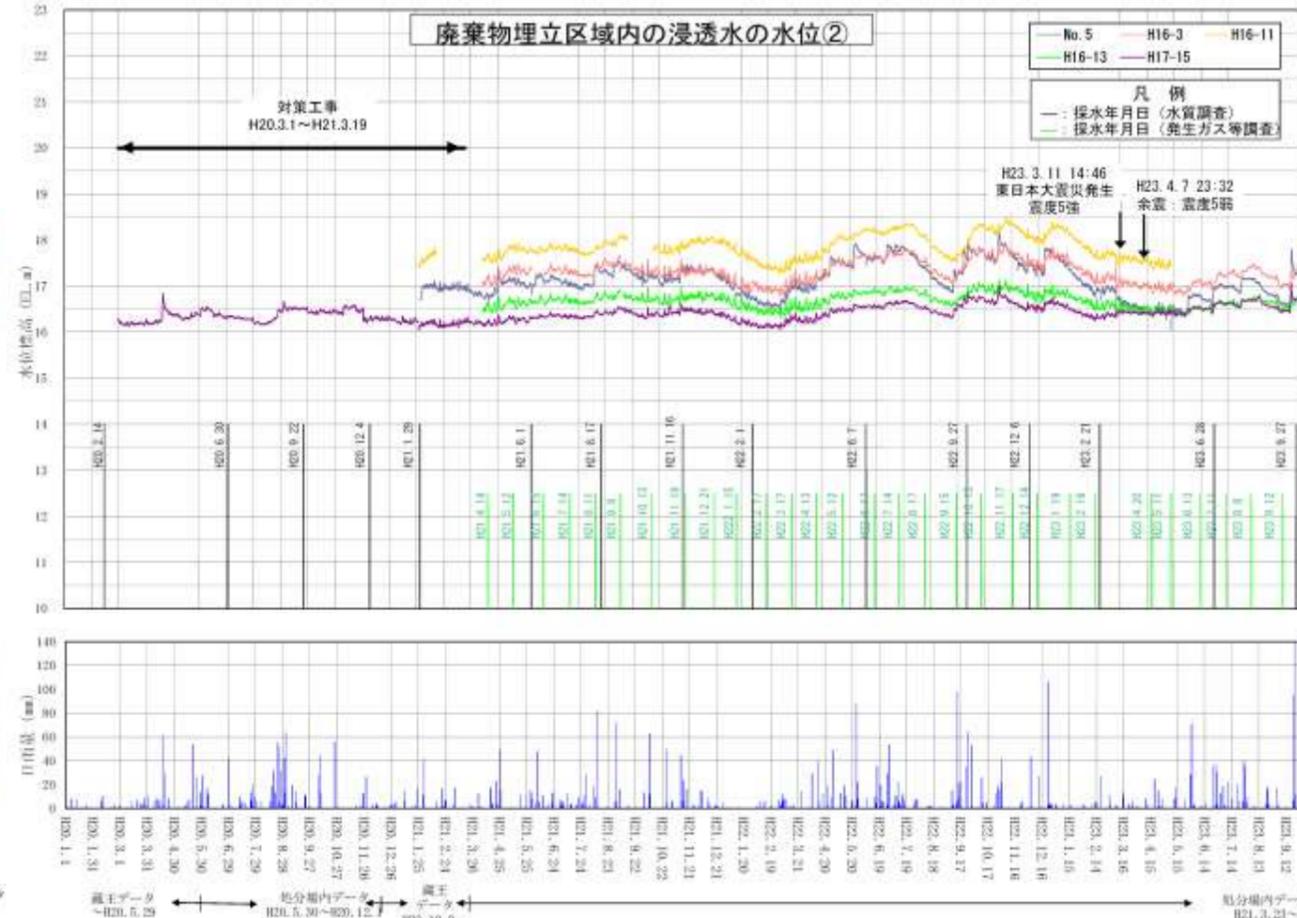
区分	孔番	地盤標高(EL.m)
浸透水	No.3	19.13
	H16-5	19.21
	H16-6	35.39
	H16-10	19.75
	No.5	20.80
	H16-3	20.36
	H16-11	20.95
	H16-13	19.30
地下水	上流	
	Loc.3	17.88
	H17-19	22.36
	下流	
	Loc.1A	15.02
Loc.1B	14.96	
Loc.4	16.11	



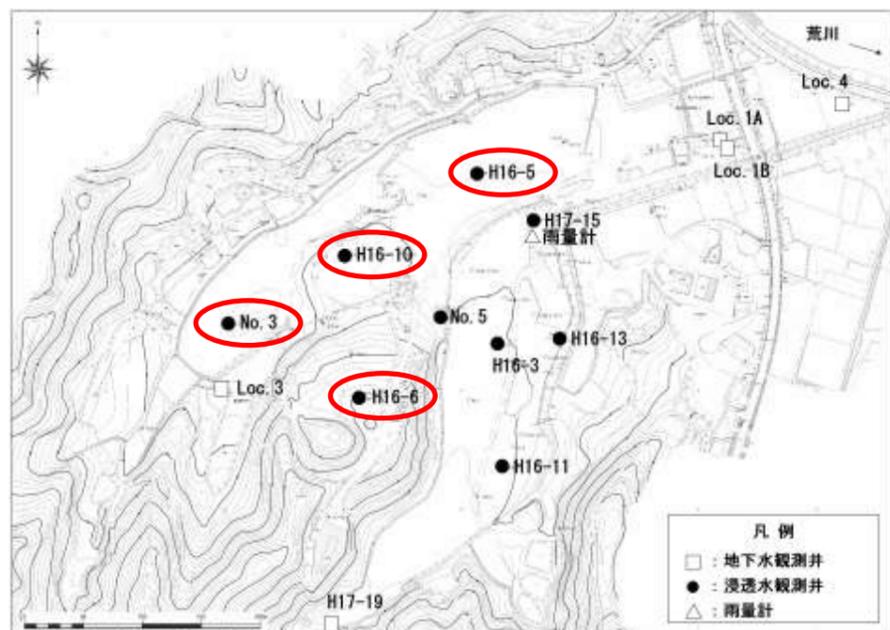
地下水位調査地点図（廃棄物埋立区域外の地下水の水位）



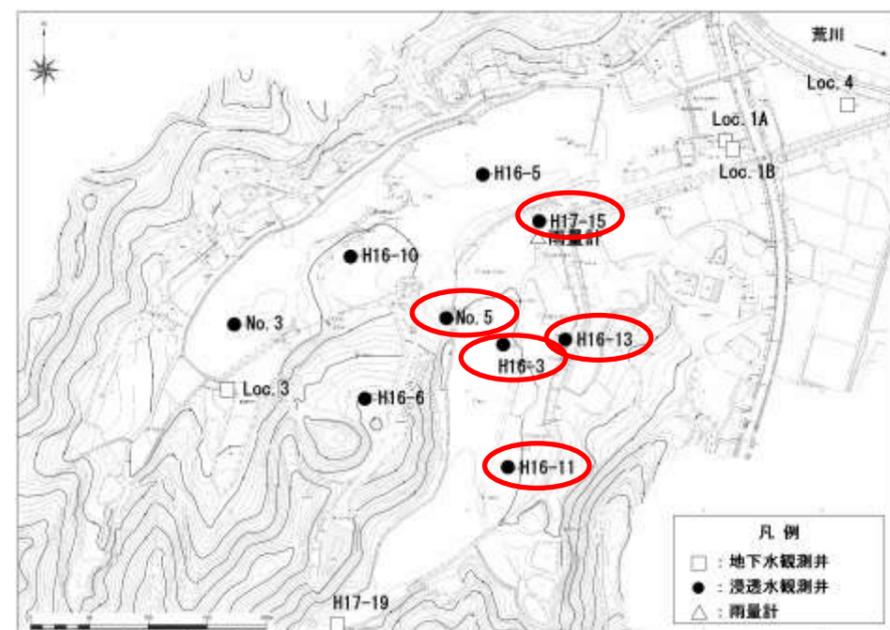
※平成23年3月の発生ガス等調査に関しては、震災の影響により未実施。



※平成23年3月の発生ガス等調査に関しては、震災の影響により未実施。



地下水位調査地点図（廃棄物埋立区域内の浸透水の水位①）



地下水位調査地点図（廃棄物埋立区域内の浸透水の水位②）

### 2.3.3 多機能性覆土状況調査及び地表ガス調査

多機能性覆土の性能の確認のため、多機能性覆土施工箇所 13 地点と比較対照地点 13 地点で、地中のガスを地表から強制的に吸引し分析する非穿孔型土壌ガス調査法(グラウンドエアシステム)による調査を 6 月と 9 月に実施した。

また、平成 22 年度表層ガス調査において比較的硫化水素濃度が高かった 2 地点(うち 1 地点は作業道路上であったため周囲の 4 地点で実施。計 5 地点)を選定し、多機能性覆土状況調査と同様の調査方法で地表からの放散状況を調査した。その結果は、以下のとおりであった。

#### (1) 多機能性覆土状況調査

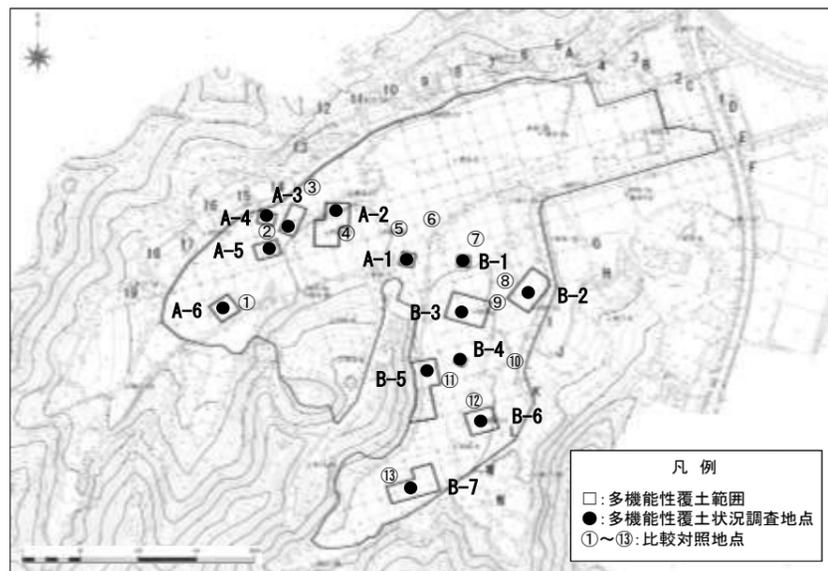
- 多機能性覆土施工地点及び比較対照地点のすべての地点で、硫化水素濃度は定量下限値(0.2ppm)未満であった。

#### (2) 地表ガス調査

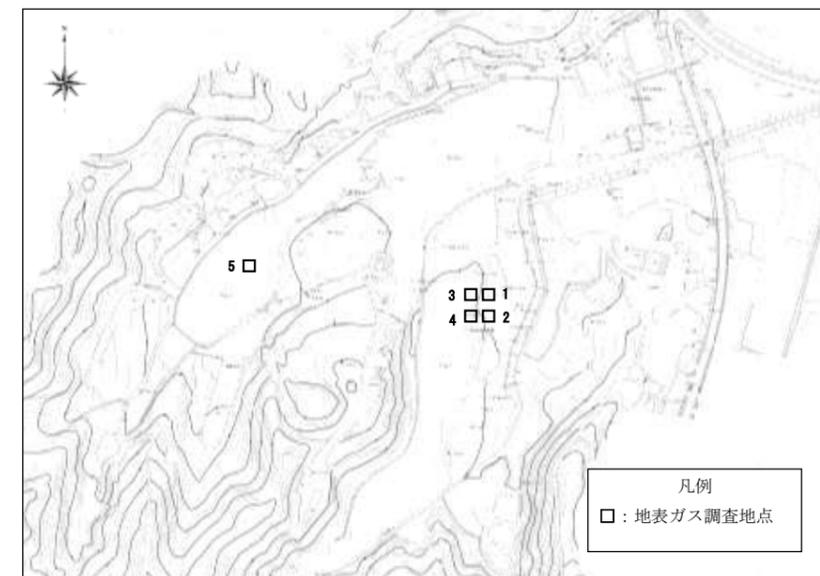
- 地表ガス調査地点全てにおいて、硫化水素濃度は定量下限値(0.2ppm)未満であった。

多機能性覆土状況調査結果一覧表

種別	地点名	硫化水素ガス濃度(ppm)		大気圧(hPa)		地下ガス吸引圧力(MPa)		気温(°C)	
		H23.6.9	H23.9.8	H23.6.9	H23.9.8	H23.6.9	H23.9.8	H23.6.9	H23.9.8
多機能性覆土地点	A-1	<0.2	<0.2	1009	1013	-0.011	-0.020	28.5	28.0
	A-2	<0.2	<0.2	1010	1013	-0.009	-0.013	26.5	28.0
	A-3	<0.2	<0.2	1008	1013	-0.004	-0.010	28.5	28.0
	A-4	<0.2	<0.2	1008	1013	-0.009	-0.017	28.5	27.0
	A-5	<0.2	<0.2	1008	1013	-0.010	-0.013	29.0	27.0
	A-6	<0.2	<0.2	1008	1013	-0.009	-0.010	27.0	28.0
	B-1	<0.2	<0.2	1009	1014	-0.016	-0.024	29.0	30.0
	B-2	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.010	-0.019	29.0	31.0
	B-3	<0.2	<0.2	1009	1014	-0.014	-0.008	29.0	31.0
	B-4	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.012	-0.019	28.0	30.5
	B-5	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.015	-0.022	27.0	29.5
	B-6	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.010	-0.010	29.0	29.0
	B-7	<0.2	<0.2	1010	1014	-0.019	-0.010	26.0	28.0
比較対照地点	①	<0.2	<0.2	1008	1013	-0.009	-0.009	27.0	28.0
	②	<0.2	<0.2	1008	1013	-0.009	-0.018	30.0	27.0
	③	<0.2	<0.2	1008	1013	-0.008	-0.011	28.0	27.5
	④	<0.2	<0.2	1008	1013	-0.008	-0.022	28.5	28.0
	⑤	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.008	-0.023	28.5	30.0
	⑥	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.010	-0.022	28.5	30.0
	⑦	<0.2	<0.2	1010	1014	-0.013	-0.022	27.5	30.5
	⑧	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.008	-0.024	29.5	30.0
	⑨	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.008	-0.020	29.0	31.0
	⑩	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.006	-0.011	31.0	31.0
	⑪	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.012	-0.022	28.0	31.0
	⑫	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.008	-0.018	28.0	30.5
	⑬	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.008	-0.011	27.0	28.5
地表ガス調査地点	1	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.008	-0.019	29.5	31.0
	2	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.010	-0.022	31.0	31.0
	3	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.010	-0.019	29.5	31.0
	4	<0.2	<0.2	1008	1014	-0.008	-0.023	30.5	31.0
	5	<0.2	<0.2	1008	1013	-0.012	-0.011	29.0	28.0



多機能性覆土状況調査位置図



地表ガス調査位置図

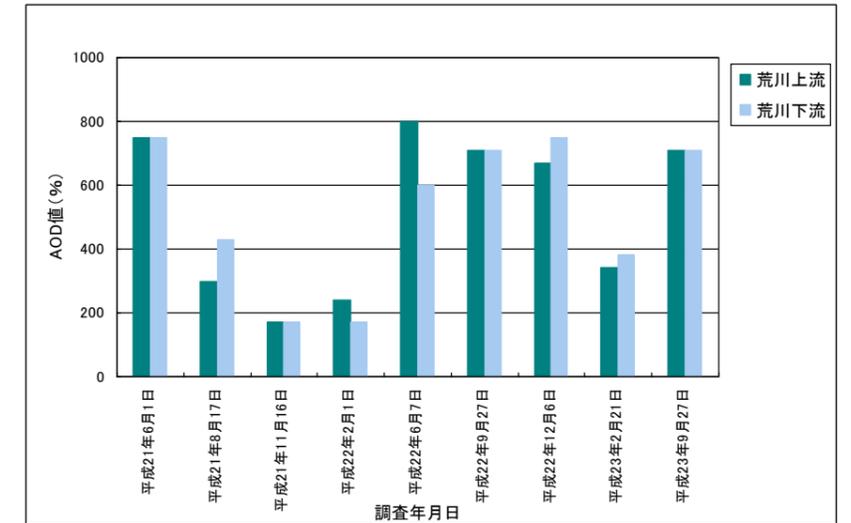
### 2.3.4 バイオモニタリング

処分場からの放流水に含まれる複数の物質による周辺環境への影響を確認するため、魚類を用いた水族環境診断法(AOD試験)により、放流水と河川水が合流する地点よりも下流側の地点における河川水の半数致死濃度(以下、AOD値という)を上流側と比較した。その結果は、以下のとおりであった。なお、AOD値が400%以上ならば、河川で魚類の生育に支障がない通常の河川水であるとされている。

- 第1四半期は、調査機関である保健環境センターが3月の大地震で被災したため調査が実施できず欠測となった。
- 9月27日の調査では、AOD値が荒川上流で710%、荒川下流で710%であり、荒川上流と下流の値に差はなかった。
- AOD試験法による調査結果から、放流水の魚毒性は荒川の生態系に影響を及ぼさないレベルであると判断される。
- 調査日直近の降雨状況は、9月20日から9月22日にかけて台風の影響により大雨であったが、その後回復し、直近の3日間は降雨がなかった。また、荒川の水量は上流で1.36 m<sup>3</sup>/s、下流で1.38 m<sup>3</sup>/s、放流量は0.00008 m<sup>3</sup>/sであった。



バイオモニタリング (AOD試験) 位置図



バイオモニタリング (AOD試験) 結果図